



辟雍（へきよう）の由来

「辟雍」とは古代中国における「大学」のことです。

周代といいますが、約3000年も前の古代です。大学に相当する機関は、東序（とうじょ）・瞽宗（こそう）・成均（せいきん）・上庠（じょうしやう）・辟雍（へきよう）の5つに分かれていました。そのなかで中央に位置していたのが「辟雍」です。それで後に辟雍が大学の代名詞として用いられるようになりました。辟雍は天子が学問を教えられたり、儀式を行なったりする場所であり、他の4つで音楽・舞い・礼儀などいわゆる六芸を教えたといえます。

「辟雍会」の名は、そんな故事にちなんで人文社会科学系中国文学の佐藤正光准教授が命名されました。大漢和辞典（諸橋轍次著・大修館書店）によれば、「辟」には57通りの意味があります。良い意味もあれば悪い意味もあります。中に「たま」というのがあり「壁に通ず」と述べられています。壁とは宝物のことです。「雍」にもやはり様々な意味がありますが、ここでは「睦む（むつむ）」という意味を採りたいと思います。

東京学芸大学の宝物は言うまでもなく卒業生です。また在校生や教職員の一人ひとり、つまり東京学芸大学に関わるすべての人間こそがかけがいのない宝物です。ですから「辟雍会」は、大学の宝物である多くの人たちが集まり「睦みあう」場であると考えられます。本来の意味は「明達諧和」とのことです。

目次

-
- 2 ドゥーユーノウ Sadako ? 荒尾禎秀
-
- 4 「若草もゆるの生まれ方」
作詞・作曲・編曲者を訪ねて 遠藤満雄
-
- 10 [学生座談会]
地方出身の学大生が語る 東京と地元
-
- 16 「卒業後は地元に帰りますか？」／辟雍会入会者数
ヘキヨウネット「地方が好き。」
-
- 18 北海道 米村牧場 牧場主 米村好朗
- 20 岩手 宮古市立千鶏小学校校長 細越 馨
- 22 新潟 木工作家 市川正和
- 24 埼玉 埼玉県立大学長 佐藤 進
- 26 富山 富山市立堀川小学校長 大岩久七
- 28 鳥取 曹洞宗興雲寺 住職 吉田廉士
- 30 福岡 ファッションデザイナー 中村展子
- 32 沖縄 沖縄国際大学非常勤講師 平良宗潤
-
- 34 支部をつくろう 中山泰志／金沢育三
-
- 36 「花の香楽会」地域文化運動一年の軌跡 鷲山恭彦
-
- 38 師範学校の歴史 遠藤満雄
-
- 42 TGU200 号記念 Review 千葉美波
-
- 44 大学／学生のエコ活動
-
- 46 小金井分校昔心地 — 恩師をしのんで 林 静代
-
- 48 本部／各部報告
-
- 49 編集後記
-



辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）機関誌
辟雍 2007 年 第 4 号

平成 19 年 11 月 1 日

発行者 荒尾禎秀

編集者 真山茂樹

デザイン 池上貴之

事務所 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
東京学芸大学 20 周年記念飯島会館内

郵便番号 184-8501

代表電話 042-321-8820

HP www.u-gakugei.ac.jp/~dousou

E-mail dousou@u-gakugei.ac.jp

印刷 (有) サンプロセス

ドゥーユーノウ

Sadako?

荒尾禎秀

辟雍会会長・東京学芸大学教授



守屋敦子さん。

1960年3月に東学大を卒業した。出身は東京都。卒業後、中学校の教員になる。在職十余年の時初めてオーストラリアに遊ぶ。これがきっかけで1990年から1年間、日本文化を伝えるプログラムによりオーストラリアの小学校にインターンとして教壇に立つ。その後定年を前に退職。1999年に一念発起して目白大学大学院（国際学）に学ぶ。さらに思うところがあつて2000年には有限会社「よも出版」を起こす。

日本全国から、さまざまな理由で、学生はこのキャンパスに集う。限定された期間、来る日も来る日も一緒に生活する。真理の追求とあわせてモラトリアムの社会的や人間を学ぶ中で、好きな奴や嫌いなヤツができ、やりたいこととやりたくないことが色分けされる。やがてそれを引きずりながら「じゃあな」といった感じで旅立つ。あんなに密度の高い人間関係であつたのがウソのように、卒業後の新しい世界での人間模様の中に自分を溶け込ませ、新しい人間関係を織りなしていく。

守屋さんもそういうことだと思ふ。誰もが「えもいわれぬ思い出の時間」を胸に卒業する。守屋さんの時代はいわゆる「安保」の時代、一層であろう。卒業した後は、高度成長社会の中でダイナミックな仕組みに翻弄されながら「自分」の世界を切り拓く。日常では、大学時代の気のあつた旧友とは、たまに会っておしゃべりをし、「またね」といつて別れる。そういった生活もあつたであろうが、むしろ新たな世界とのかかわりの中で、人間関係は前へ前へと広がりを持って進んでいった。守屋さんはお兄さんを訪ねてのオーストラリア旅行の中で、その自然と人にいたく感動し、こういうところで教壇に立ちたいと思ったという。

私の担当したクラスの学生たちも、卒業後、たまに集まってみんなで飲む。特に地域的に遠くにいる人の動向がクラス会開催のキーになるようだ。「陽一君来日」とか「孝司くん来日」とか、メールで情報が走る。その謂いは「上京」。早速旧交を温めることにな

『Do you know Sadako?』（守屋敦子著・発行よも出版 発売千草書房・2002）

『サダコ』（カール・ブルックナー 著 片岡啓治訳・発行よも出版 発売千草書房・2002）

る。先日もあるクラスは鳥取、名古屋からの「来日」者がいるというだけで、急きょクラス会。またあるクラスは「そろそろやりませんか」ということで結集したもの、東京人ばかり。そこで集まった面々で今回は熊本にいる同級生に電話、となる。毎年決まった日にクラス会をするところも多いようだが、このように「来日」する人に合わせての会もあるようだ。いずれにせよ、皆が集まればセピア色になった時間はとても懐かしい。私の自分自身のクラスの会は卒業後まったく開かれていない。クラス会が開かれるには有能で根気強い世話人が必要だ。

守屋さんは「辟雍会」が設立されて程なく、出版の仕事の力量をこの会でも生かしてくれるということで、『辟雍』の創刊号以来その編集に従事した。多忙な守屋さんであるが、同窓会とつながってくれたのは人手不足の会にとってとてもありがたいことであった。頼もしくもあった。

ところで、守屋さんはなぜ、出版社を自ら立ち上げたのか。オーストラリアから帰国後、多

くの友人を訪ねての改めての訪豪の折、訪問した小学校で児童から「ドゥーユーノウ Sadako?」と尋ねられたところに起因している。すべてはここから始まった。

「Sadako」……あの広島の「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子のことである。守屋さんは、日本人が忘れてしまっているあの子のことを、オーストラリアの児童が知っている、今を生きる教材に「Sadako」がなっている、といったことに強いショックを受けた。それから守屋さんは、「Sadako」が世界でどのような広がりを持っているのかを検証することになる。同時にそれは、日本での平和教育、原爆教育の風化の後進性へのしきりなる警鐘でもあったはずだ。

「Sadako」が世界的に認識され、平和希求の象徴となったきっかけの一つはカール・ブルックナー（豪州）の小説であったが、あろうことか、日本語版は絶版になっている。守屋さんはこの本の再刊のために、そのことのために、友人と出版社を作ったのである。20世紀最後の原爆記念日にはこの本を出したいという緊迫した燃え

る決意の中で。

「Sadako」に関する研究をする中で、また『サダコ』の刊行までの間には、多くの友人との出来事があり、神の啓示か導きかと思えるほどのいろいろな人と偶然なる出会いがあった。守屋さんの豊かな人間性によるところが大きいのであろう。

小さな小金井のキャンパスで学んだ同窓生は、全国のいたるところで、世界の随所で、活躍している。辟雍会ホームページには「辟雍会入会学部学生出身県別分布図」がアップされている。これを見れば学生は日本全国から集まって来ていることがよくわかる。このホームページに今はないが、就職先、活躍先のマップを作れば、はじめていった同窓生の日本各地での、そして世界での活躍ぶりが見えるであろう。学芸大学の同窓生ひとりひとりがそのような力を持っているのだと、守屋さんの例も含めて、強く思う。

守屋敦子さんは今年9月に癌で倒れた。急なことであった。

守屋さんの遺影は、大学の20周

年飯島記念会館で『辟雍』の編集をしていた時のような、穏やかな中にも凜凜しさのある顔立ちであった。昨年度の『辟雍』3号の「メルヴィル島訪問記」（辟雍会ホームページ「リレーエッセイ 折々のこと」から写真を付しての転載）が見である。

葬儀で配られた守屋さんの著書『Do you know Sadako?』には、迷いの後に大学院進学を決意した時のこととして、次の一文があった。同窓とは、結局のところ、良くも悪くも家族のようなものであろうか。

「心を決めてからは簡単です。行動あるのみです。四十年近くも前に卒業した大学から、卒業証明書と当時履修した科目の成績が送られてきました。こんなに時が流れても、大事にされている私がある」のだ」。

（荒尾禎秀 1969年国語科卒・1972年修士修了）

「若草もゆるの生まれ方」

遠藤満雄（1968年社会科卒）

作詞・作曲・編曲者を訪ねて

辟雍会副会長・ジャーナリスト・元毎日新聞

機関誌「辟雍」は創刊号以来、巻末に「若草もゆる」の歌詞と楽譜を掲載してきた。会員からは「なつかしい」とか「譜面があるのですねに演奏できる」とか「これを片手に同窓会の最後に大合唱している」という感想が寄せられている。今年度は事業部の尽力でこの「若草もゆる」のCDも完成した。

あらためて本号の9頁をご覧ください。「東京学芸大学学生歌若草もゆる」の後に括弧で（昭和32年制定）とあることに気づかれることと思う。そう、今年（平成19年＝2007年）は、その制定から数えてちょうど50年である。

辟雍会と大学はこの学生歌制定50年をにぎしく祝いたいと、11月3日のホームカミングデーのメインイベントとして「若草もゆる制定50周年記念行事」を共同で執り行うこととなった。作詞・作曲・編曲者にも参列していただく予定である。

それに先立って、50年前、この学生歌の作詞、作曲、編曲に携わった卒業生を訪ねて、お話を伺う機会を得た。以下はその報告である。

新大阪から特急で3時間余り、紀伊半島の突端の町「串本駅」に降り立った

♪ここは串本向かいは大島、
仲を取り持つ巡航船 ア
ラヨイシヨ ヨイシヨヨイ
シヨ ヨイシヨ・・・♪

という馴染みの「串本節」の歌詞

を記した大きな観光看板が出迎えてくれた。出迎えてくれたのは「串本節」ばかりではない。駅の改札口にはかねて打ち合わせの通りの装いで

（胸に白い紙を挟み、帽子を被っている）、「若草もゆる」の作詞者・山田南海司さんが待っていてくれたのだ。挨拶もそこそこに山田さんの運

転するクルマで、ご自宅に案内してくださった。

山田さんは串本駅から10分ほど離れた集落の一角に奥さんと二人暮らしだった。串本を中心にした和歌山県の南部で中学校・高校の美術教師37年間を勤め上げ、現在は奥様と二人きりの自適の生活を送っているということだった。

さっそく「若草もゆる」作詞のいきさつを伺うことにした。

「それがねえ、なにしろ50年前のことでしょう。思い出そうとずいぶん努力してみたんですが、細かいところはどうしても思い出せないですよ」と言いながらも、遠く50年前の思い出を語ってくれた。

山田さんが東京学芸大学に入学したのは昭和29年（1954年）。子供のころから絵を描くことや物を作ることが大好きで、高校時代から「美術の道に進みたい」と思うようになった。それでどうせ目指すなら日本一を、ということで、東京学芸

大学を進学先に選んだ。両親も高校の先生も必ずしも賛成はしなかったが、一度こうと決めたなら何でも試してみろという性分だった。往復の汽車賃だけをポケットに上京した。知り合いの家に泊めてもらって「芸大」を受験した。が、結果は「不合格」。

意気消沈して寄宿先に戻っていると、宿のおばさんが「東京には芸大ばかりじゃない。一字違いで東京学芸大というものもあるよ」と教えてくれた。調べてみると、東京学芸大学にも「美術科」はある。

「実は和歌山を出てくる時に地元のと和歌山大学に願書は出してきていたんです。和歌山大は二期校なので芸大がだめだったら、すぐ地元に戻って和歌山大を受けるつもりだったんです。ところが下宿のおばさんに言われて東京学芸大学を調べてみると、ここも二期校で、まだ願書を出せることがわかった。さっそく和歌山に連絡して高校から必要書類を取り寄せてもらって急遽学芸大を受

けたのです。学芸大が旧師範学校を母体にできた大学で、教員養成を目的にした大学だとはいえなく知りませんでした。そんなことより好きな美術ができるということの方が魅力でした」

そんな経緯で東京学芸大学に入学したのだが、学費はもとより生活費も自分でまかなうというのが、親と交わした約束だった。そこで大泉寮に入り、あらゆるアルバイトに明け暮れた。

「美術科というのは画材など材料費にけっこうお金がいるんです。僕は工芸を専攻しましたので、その材料費はかなりのかきむ。そこでもっぱら実用的な家具などを作りましたね。材料代を出してくれた人に、その作品は差し上げるといって切り抜けたのです。おかげで僕は学生時代の作品というものが一切残っていないんですよ」と笑った。

昭和30年代の初頭、世間には「苦学生」と呼ばれる人たちがたくさん

いたが、山田さんそんな「苦学生」の一人、いや、極めつけの苦学生であつたようだ。

山田さんが「苦学」することになったのは、その名前「南海司」もいささか関連している。「南海司」なみじ」とは、父親が付けてくれた名前である。南国・和歌山の海辺に因んだ名前なのかと思つたが、南海は南海でもさらにずっと南の国に因むのだそうだ。和歌山といえは、明治以来海外移民の大変に盛んな土地である。山田さんの父親もそんな和歌山の気風を持って、南国はフィリピンに渡つた。

「南の海を司するような男になれ、というたいそうな意味を込めてオヤジは付けたらしいのですが、オヤジの仕事も戦争が始まって余りうまく行かなくなり、僕は母親に連れられて先に和歌山に引き上げてきたのです。だからフィリピンのごとは何も覚えていないのですがね、名前だけが残りました」と言う。やがて日本の敗戦、山田家の苦闘が始まった。東京で暮らす次男の南海司さんに仕送りをするような余裕はなかったのだ。

「学校の勉強はとても楽しくて、

教育実習もあり、教師になろうかなと

思い始めていた4年生の始めのころだったと思います。クラスの仲間が『おい、学生課が学生歌の歌詞募集というのをやっ



当時の大泉寮

とああた、こうだと添削した覚えがあります。」

山田さんは『賞金目当てに作詞したというのは、書かないでほしい』と何度も念を押された。しかし、50年前のことであるし、経緯を正確に記録する上でも大事なことだと思えるので、あえて、言葉の通りここに記すことにする。

山田さんの応募に至る経緯はこのようなのだが、これ以外のことはまったく思い出せないとも言う。つまり、いつ、誰が、どのような経緯と動機で『学生歌の募集』を行ったのか、皆目わからないし、自分の詞が当選したこともいつどのように決まったのか、どんな連絡があったのかも覚えていないという。ただ、間違いなく賞金はもらったし、その3千円は大変に貴重な金額であつたことは覚えて



いるという。2年後山田さんは中学校教師として串本に戻る

ことになるのだが、その時の初任給が7千8百円だったと言うのだから、現在の貨幣価値に換算するとざっと10万円近くにもなるうかという額である。

ともあれ、いったいどれほどの応募があつたのか、どのような選考基準と選考委員、どのような手続きで山田さんの「作品」が「入選」になったのか、山田さんには皆目わからないという。さらに不思議なことに、この入選作品の発表会、あるいは「学生歌制定記念式典」のようなものが催されたという記憶もないという。それどころか、山田さんの詞に曲が付いて（作曲者については後述）、学生歌はできあがつたのに、山田さんの許にはその譜面も届かなかつたという。

「あの詞が学生歌になったことは知っていましたが、さてどんな曲になったのかは、ずっと知りませんでした。今から25年ほど前、たしか美術科の同窓会から便りがあつて、その中に『若草もゆる』の譜面の印刷された小さな資料があつたのです。僕は楽譜が読めませんが、同僚の奥さんでピアノの弾ける人がおられたので、そこに持っていってちょっ



【作詞】山田 南海司 氏
(昭和33年 美術科卒)

「若草もゆる 武蔵野の

広きながめに はぐまれ」

と歌いだし、

「流れも清き 多摩川の

つきぬ風情に はぐまれ」

と歌い継ぐ詞をつむぎ、さらに、

「文化の都 建学の

崇高理想に はぐまれ」と

綴った。

と弾いてみてくれ、とお願いしたのです。それで初めてどんな曲なのかわかった次第です。僕は作曲された佐久間さんとはまったく面識がありませんし、その後も交流はまったくありません。この『若草もゆる』が学生歌として折りあるごとに歌われているというのは、本当に晴れがましいことですね。佐久間さんの曲も大変に歌いやすくて、いい曲になったと思います。そんな折、辟雍会から『若草もゆる』のCDが送られてきました。それこそ宝物のようにして聴いております。

山田さんの御宅の庭から見える紀伊の深い緑に視線を注ぎながら、山田さんの深い情感に思いをはせた。

山田さんは昭和33年春に卒業の時期を迎えたが、そのころには東京で美術教師になる、という進路を決めていた。ところが折悪しく、その年東京都は中学校の美術教師の募集をしなかった。仕方なく、もう一年、「専攻科」に籍を置いて、さらに勉強を進め、翌年の機会を待つことにした。しかし、翌年も募集はなし。そんな時、串本の出身中学校の校長先生から「故郷に帰れ。母校に教師の席を用意する」という連絡があった。山田さんは意を決して、故郷に帰ることになった。以来50余年、故郷の和歌山で教師一筋に生きてきたのだ。今回のホームカミングデーは、そんな山田さんにとって、まさに50年ぶ

り、また50年ぶ

りの母校訪問なのである。

作曲の佐久間威さんは、山田さんが4年生の時入学した。つまり3年後輩である。佐久間さんは東京生まれの東京育ち。文京区出身である。都立小石川高校から東京学芸大学乙類（中学校教員養成課程 数学科）に進んだ。

「入学当初はそれほど強く教師になろうという意識はなかったのですが、4年間過ごすうちに教職に進むことを真剣に考えるようになって、卒業後は迷うことなく東京都中学校の数学教師になりました。以後五十七歳で退職するまで、都内、それも主に板橋、豊島、練馬といった北部の中学校で教壇に立ち続けました。退職するまで授業をしていました」

という、教員生活一筋に生きてきた



【作曲】佐久間 威 氏
(昭和36年 数学科卒)

ことでは、山田さんと同じ「人生」といっていいだろう。

佐久間さんが『若草もゆる』の作曲者になったいきさつは、これまた不思議な因縁がある。

「入学して間もなくのことでした。バスを降りて校門（たぶんプール門）を入ったあたりで、突然のにか雨に遭遇したんです。教室はキャンパスの西のはずれの方ですから（数学科など理系の拠点である自然館はまだなかった）、そこまでは行き着けない。仕方なくそばにあったサークル長屋（戦前の兵舎をそのまま利用した木造平屋建ての建物）の軒先を借りて雨宿りをしたんです。そこがたまたま「草原コール」という混声合唱団の部室でした（「草原コール」は最近まで存

在した。もともと歌を歌うことは嫌いではなかったのです。それが縁でそのサークルに入ることになったのです」。

それから佐久間さんの音楽との関わりが始まった。草原コールは、当時盛んになりつつあった「歌声運動」のブームとあいまって、活動は活発だった。キャンパス内の芝生に集まっては合唱の練習をしていた。

「そんな折、確か学生課の掲示板だったと思いますが、作曲者募集という張り紙があって、そこに詞が掲げられていた。本当に興味本位の軽い気持ちから、応募してみようという気持ちが起こって、まったく見よう見まねでメロディーを作ったんです」。

佐久間さんは作曲を本格的に学んだことがあるわけでもなく、楽器の演奏もできなかった。ときどきハーモニカを吹く程度だったという。小学校課程の免許を取るためのピアノ演奏の授業にはほとんど苦勞したというほどだ。それでも、音楽的素養は生まれつきのものだったのだろう。佐久間さんの応募したメロディーは「当選」となった。

「当選」となった。

「当選の連絡がいつどんな形であったのか、まったく覚えていません。ただ、確かに賞金はもらいました。その金で半期分の授業料を納入したことを覚えていますから、山田さんのいうように3千円だったでしょう。当時の年間授業料は確か6千円でしたからね。」



当時使われていた校舎

これは現在の貨幣価値と換算しやすい金額だ。つまり、「若草もゆる」の作詞、作曲者には、半年分の授業料に見合う賞金が支払われた、ということである。

それにしても生まれて初めて作詞をした山田さんの作品と、これまた楽器の演奏もままならない、いわばずぶの素人の佐久間さんの作品が、当選して、その後50年歌い継がれることになる「学生歌」が誕生したことは意外なことであった。

となると、どつしてもどのような経緯で学生課の募集が行われ、どの程度の応募があり、どのような選考を経て、二人の作品が当選したのか、知りたくなる。

もう一人、「若草もゆる」が学生歌として歌い継がれることに功績を残した重要な関係者がいる。

編曲を担当した佐々木徹さんである。佐々木さんは昭和34年（1959年）に音楽科を卒業した。つまり、佐々木さんもまた、学生歌「若草もゆる」の制定の当時、学生であったのだ。どのような経緯で佐々木さんが「編曲」を担当することになったのか、その証言を求めようと思う。

佐々木さんは東京都目黒区出身、卒業後、都内の中学校で音楽担当教師を二十余年やり続けてこられた。在ベネズエラの日本人学校に3年間勤めた後、帰国し、間もなくして53歳で少し早めの退職をされた。その後は自らの信念に基づいて熟教師などをしながら過ごしてきたという。現在は千葉県の大網白里町に同じ音楽科出身の奥様と二人で住んでおられる。

「僕が編曲することになったいきさつは、音楽科の音楽理論の教授であられた柏木俊夫先生（故人）のお申し付けによるものでした。ある日先生は譜面を持ってこられて、これを合唱用に編曲してみろ、とおっしゃられました。なぜ僕が指名されたのか定かではありませんが、その前に級友のコンサートに当たって僕が編曲を担当していたのを先生が覚えていてくださったのだと思います。それが学生歌だとはわかりましたが、どのような経緯でそれが当選になったのか、詳しいことはわかりません。僕は柏木先生の言われる通り編曲をして先生にお渡ししました。それでいいということになったのだと思います。それにしても詞もよくできて

いましたし、作曲も音楽の専門でない人が作ったとは思えないほどよくできていました。編曲で苦労したという覚えはまったくありません。」

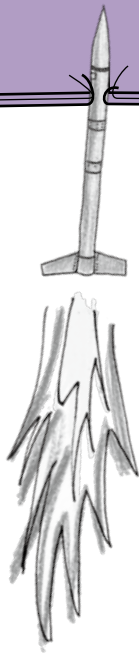
作詞、作曲とも音楽専門の佐々木さんも驚くほどの出来栄であったことはよくわかったが、学生歌制定に関わる細かい事情はわからない。

やはり、大学の資料に当たってみるほかはあるまい。まずは昭和45年（1970年）3月3日発行の「東京学芸大学二十年史―創基九十六年史―」をひも解いてみる。この「二十年史」は第1編・大学二十年史、第2編・師範学校七十八年史、第3編・附属学校史、第4編・同窓会史の4編から構成され、960ページに及ぶ大部である。学生歌に関する記述があるとすれば、当然第1編の大学二十年史に関わる部分であろう。第1編は、第1章・学制改革と東京学芸大学の創設、第2章・分校併立から統合まで、第3章・大学の整備と発展、第4章・教育課程の編成、第5章・学科・課程（講座・教室）、第6章・附属図書館・研究施設という6章立てで記述されているのだが、残念ながらここにキャンパスの

様子とか、学生生活にまつわる記述はまったくない。というとは「学生歌制定」にまつわる記事はどこにも見当たらないのだ。まさか編集者が忘れたわけでもあるまいから、制定から13年後に発行された「二十年史」の時点ですでに制定の事情がわからなくなってしまうていたのかもしれない。当時はまだ関係者も健在であつたろうに、残念なことである。

ちなみにこの「二十年史」の巻末に「附録」として12ページにわたる年表が掲げられている。が昭和32年（1957年）の項には・・・「4

（月）大学の小金井地区統合に伴い、竹早町の附属幼稚園の一部を移して小金井園舎を設置」という一項目があるだけである。念のため前後を見ると、前年の昭和31年（1956年）は「村上俊亮、東京学芸大学第2代学長となる」という一項目のみが記



され、後の年の昭和33年（1958年）は、まったくの空白である。

「二十年史」の発行から29年

後の平成11年

（1999年）3

月、「五十年史」

が発行された。

B5版の「通史

編」と「資料編

の2分冊で、合

計のページ数は

1130ページ

にも及ぶ。しか

しである。「二十

年史」に一行の記述もない「学生歌

については、こ

こでもまったく触れ

られていない。

いわゆる「大学年史」に記述がな

いのだから、他

には資料を見つけれ

ると思えない。関係者をじかにあ

たりたとしても、当時学生であつた作

詞、作曲、編曲者でさえすでに70歳

に近い年齢なので、あたるすべもな

い。

ことほどさ

ように、「事実」

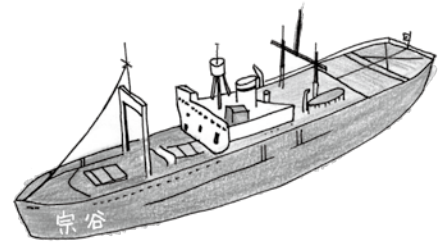
というものは、

きちんと記録

しておかない

と、時間のかたに消え去ってしま

うものなのだ。



ご存知の方、あるいは何か資料をお持ちの方がおられたら、ぜひお知らせいただきたいと思います。

歴史的事実に想像をくわえても詮無いことではあるが、学生歌制定の時代的背景を知ることには、まったく無意味だとは思えない。昭和32年（1957年）とはどんな年であつたのか、ちょっと振り返ってみよう。講談社発行の「昭和史事典」（昭和史研究会編）の昭和32年（1957年）の項の前書きには次のようにある。

・・・この年2月、病氣のためいさぎよく退陣した石橋湛山内閣の後、岸信介内閣が成立した。かつてのA級戦犯容疑者の出馬は、保守政権が不動の地位を確立したことをあらわしていた。戦争責任は、もはや問われることのない問題とされた。

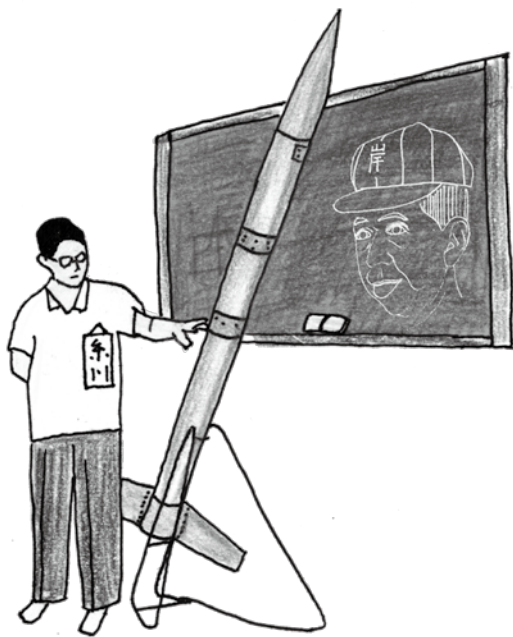
この岸新内閣は「日米新時代」をうたい、日米安保体制の継続、強化を基本方針に掲げた。しかし相馬ヶ原演習場でおきたジラード事件にみ

られるような基地問題は、この「新時代」が何のためにあるかを示していた。岸首相は、国会で「自衛権の範囲内で核兵器保有可能」と答弁、その立場を明らかにしていた。

この年、南極観測はオングル島の昭和基地を中心に開始されたが、観測船宗谷は氷海を突破できず、ソ連のオビ号に救助された。また、九州西部の大水害は1000人近い死者・行方不明者を出した。年末に起こった天城山の心中事件の主人公の名はかつての「満州国」支配の人々に思い起こさせた。「原子の火」が

ともし、国際見本市が開かれ、国連安保理事会の非常任理事国に選ばれ、国産ロケットが打ち上げられる反面、こうした事件は、戦後の復興・成長が、なお戦時中からの問題をそのままにしていることを示していた・・・。

かくして50年が過ぎ去った。世は昭和から平成に移り、新世紀21世紀も間もなく10年が経とうとしている。次の50年・・・、どんな時代が待ち受けているのか、「若草もゆる」を歌いながら考えてみたいものである。



若草もゆる

山田南海司 作 詞
佐久間 威 作 曲
佐々木 徹 伴 奏 編 曲

れーらー さーせん の れーらー は

mf しんを まもり しんを まもり たけな けな し の せ い だ の

mf しんを まもり しんを まもり たけな けな し の せ い だ の

は た の も と さ らーらー がーらーく れー

がーらーく れー

若草もゆる　武蔵野の
広きながめに　はぐくまれ
学びの園に　相つどう
われら数千の　若人は
自由を守り　真理をきわむ
獅子の星座の　旗の下
希望輝く　わが母校

「学生座談会」 地方出身の学大生が語る

東京と地元

かつては、入学生ほとんどが東京か、

東京近郊の出身者だった東京学芸大学も、

今や8割が東京以外の出身となりました。

また、多くの卒業生が各地へ旅立っていき、

学大生が全国に広がっています。

各県に教育学部がある中で、

なぜ東京学芸大学を選んだのか、

また、地元を離れて生活する中で、東京の魅力、

地元の魅力をどのように受けとめているのでしょうか。

地方出身の皆さんに、

東京と地元を語ってもらいました。



なぜ地元の大学ではなくて、東京学芸大学を選んだのですか。

梅田◎どうしても都会に出てきたくて、国公立大学の中で探したら、この大学の多言語多文化っていうところが、一番僕がやりたいうことができると思って選びました。

佐々木◎山形大学は高校の友達や先輩がやたらと多くて……。それに高校から歩いて5分なんですよ。「これは何も変わらないな」、東京に行きたいな」と思って探しました。

司会◎でも、山形の近くじゃない所に行こうと思ったら、九州だって、四国だって大阪だってあるわけですよ。

佐々木◎山形からだとなんか東京まで新幹線一本で来られるんで。それに、雪のあまり降らない所に行きたかった。

梅田◎九州は暑そうだなっていうのがあったし、できれば、そんなに西に行きたくなかったんです。

大野◎大分は比較的過ごしやすいですよ。兄が北海道の大学にいたので、北海道に遊びにいった

2カ月ぐらい過ごしましたが、すごく暑かった。大学の図書館にもクーラーが入ってなくて。九州の方が暑くないと思った。私が学芸大を選んだのは、フットサル場で働いていた時に、お客さんに教員をしている方がいて、先生になりたいという話をしたら、教員志望なら学芸大がいいんじゃないかって言われました。学芸大なら地元で就職するにしても、東京で教師になるにしてもいいって言われたんです。

中村◎親には「私立に行かせない。何か安定した職を持ちなさい」と言われていました。だから教師だったら、親も納得するだろうって。地元がすごい田舎なんです。このあいだは、とうとう自分が通った幼稚園が廃園になって、余計、都会へのあこがれが強くなったのかな。それで、数学一本で受けられて、東京近郊で、なおかつ教師の資格が取れるところって考えたら、ここじゃないかなというになりました。

司会◎卒業したら、教員になろうと思っている人は（手を挙げてもらう）……半分以上いますね。

岸◎中学校と高校の数学の先生になりました。ですけども、

出席者

◎佐々木忠洋（山形県 G類表現コミュニケーション1年）「田舎っぶりなら皆さんに負けません。」

◎谷中 梢（栃木県 B類国語4年）「比較的東京に近い出身です。」

◎岸 昌則（富山県 B類数学4年）「地方出身に囲まされると、親近感があってうれしいです。」

◎中川絵美子（静岡県 A類理科4年）「静岡と東京以外は行ったことがないので、いろいろな地方の話聞けるのを楽しみにしてきました。」

◎青木昭憲（岐阜県 K類日本研究4年）「実家は柿を作っている兼業農家です。今朝、夜行バスで戻ってきましたが、8時間かかりました。」

◎梅田武幸（福井県 K類多言語多文化3年）「前田先生の授業でこの座談会のことを聞いて面白そうだと思ってきました。」

◎榊 原 慎（愛知県 B類技術1年）「名古屋から結構離れた田舎の出身です。」

◎中村孝貴（鳥根県 A類数学3年）「僕がおとなになるまでに、小学校が廃校になっていないかが、今一番の気がかりです。」

◎大野知沙子（大分県 A類国語2年）「この出席者の中では最南ですね。」

高校の先生に、中学校と高校の数学の免許を取れるためには、教育学部に行くよりも、理学部に行った方が取りやすいと言われたんです。何で先生になりたいのに、理学部に行って勉強しなければいけないのかとすごく思いました。そんな中で、教育学部でも中学校と高校の数学の免許が取れるところがあるのを聞いて、いろいろ調べて学芸大が教育の設備も整っているとわかったので受験しました。

都心の大学と違うと感ずることはありますか。

谷中◎小さいころから、品川の親せきに遊びに来ていたので、東京へのあこがれというのは感じないですね。でもやっぱり、23区の方よりは、こっち（小金井）の方が多少落ち着く感じがする

ので、やはり都会との差があるのかなと感じています。

中川◎私は学芸大に来る前に、1年間、山手線の真ん中にある法政大学に通っていたんですけど、東京の中で大気汚染ワーストスリーに入ると言われていました。それから、桜並木はすごくきれいなんですけども、学芸大みたいに木がいっぱいあることはないし、どこもかしこもコンクリートばかりでした。学芸大の中ではサンシャイン（総合教育科学系研究棟）の9階建てが都会っていう感じですけど、法政大は普通の校舎が8階建てなのに、回りが高い建物ばかりなので、8階でもすごく低く感じました。学芸大とは全然雰囲気の違いがありますね。

榊原◎修学旅行で東京に1回来たのですが、その時は都心の方ばかりだと思っていたんです。こっち（小金井）に来て、自然があつて、うちの地元と変わらなくて、夏も結構過ごしやすいんで、学芸大はよかったなと思います。

司会◎愛知のどこですか。

榊原◎西尾です。

司会◎西尾市、都会じゃないですか。

榊原◎駅前結構あるかもしれないけど、外れの方に行くと、田んぼばかり。

司会◎青木君はどうですか。

青木◎そうですね、東京にしかないものがないなと思って。僕は、メディアに関心がありました。テレビ局も東京にあるのがメインなので、そういうことに興味があつて来てみたいというのが大学に入るきっかけなんですけど、

実際に来てみると、岐阜にしかないものもあるなと思いました。岐阜県は結構水がおいしくて自然が豊かなので、帰るたびに思います。

司会◎自分の地元の方が水はおいしいと思う人、ほかにいますか？

佐々木◎水道水をよく飲んでるんですけど、冷やせばそんなにまずくないみたい。最初、びびって、ペットボトルの水をちゃんと飲んでたんです。お腹をこわした話を聞いたことがあるので結構いやだったんですけど、飲んでみたらそんなにまずくない。

司会◎学芸大学の水は、実はおいしいんですよ。大学の農場の所に取水塔があつて、地下水をくみ上げています。ただ、皆さんが住んでいる所では、水道管を通じて川の水が運ばれるので、ちよつと違うかもしれませんね。

学芸大学に入学してから意外だったことはありますか。

梅田◎僕は、試験を受けるときに初めて学芸大まで来ましたが、国分寺はあまり地元と変わらない



対人関係が少ないとか、相談相手がいないということはありませんか。

谷中◎4年生なので、サークルや

と思いました。やっぱり、東京という楽しい所というイメージがあったんですけど、国分寺を歩いてみて、東京もいろいろだなと・・・。

大野◎噴水前で飲み会をやって、明け方、ごみの掃除をしていたら、タヌキが出てきてびっくりしました。ああ、タヌキがいるんだーって。

司会◎いるんですよ。タヌキが通る道というのがあって、守衛所の裏から中学校の方へ行く道。生協のカフェの裏にも出るらしい。

大野◎すごくかわいかったんですよ。

佐々木◎小平の方で、キツネ、見ました。フェンスの所を、2メートルくらいジャンプして、消えていったんですけど。

司会◎地元ではそういう野生動物はいましたか。

榊原◎シカがいます。クマも。クマに襲われます、人が。

学科の友達など、かなりたくさん相談相手がいます。学芸大のすぐ近くにも実家の知り合いがいます。先生も、結構親身になって相談にのってくださったりするので。

中村◎地元では同年代がそんなにいないんです。実家が高校から結構離れていて、普段、会いたいとか、今、相談したいっていう時に、じかに会って相談できるような人間がいなかったで、むしろ今の方が多いと思いますね。ただ、年上というか、親世代の人からしかられるっていう経験は、やっぱり減っているように感じますけど。

佐々木◎1年生なので、それほど友達関係は深くないんですけど、意外に大家さんと仲がいいんです。実家は一軒家だったので、それほど町内の方との交流は多くなかったんですけど、こちに来て、初めて世話になったのが大家さんでした。玄関にアリが出て困っていたらアリの駆除剤をくれたんですよ。

司会◎アパート住まいだと、大家さんとの付き合いはあるかもしれませんね。ほかの皆さんはどうですか。

大野◎うちは不動産屋さんが管理していて、大家さんとは・・・。

岸◎大家さんがアパートの1階で畳屋さんを経営しているのので、出て行くときや帰ってきたときに、大家さんにあいさつします。それに、大家さんから「学校？」とか聞かれたりします。そういつた、ちよつとした優しさってありがたくなって思うことがあります。

榊原◎アパートの近くに大家さんがいるんですけど、朝、ごみを出すときに、掃除をしているのであいさつをしたりとか、帰ったときに「ネットの補修を手伝いましょうか」とか声かけて手伝ったりするので、結構話をします。むしろ同じアパートに住んでいる人は時間帯がずれているのか全然会いません。

中川◎私も、大家さんは1階に住んでいますけど、会ったときにはあいさつをするくらいです。実家の母親からたまにお茶などが送られてきて、「これは大家さんに渡しなさい」と言われたときに持っていくくらいです。

司会◎割合、大家さんとのコミュニケーションはあるんですね。逆に榊原さんが隣の住人と話した

り、会ったりすることが少ないって言ったけど、そういうところはありますか。

佐々木◎アパートへ来た当日に、1人くらい会ったんですけど、あとはまったく会った記憶がない。

自転車があったり、シャワーの音なども聞こえたりするので、人がいるのはわかるんですけど、見たことはない。

司会◎そういうのは気持ち悪いと思わない？

佐々木◎別に気持ち悪いことではないですね。

岸◎地元では、家の周りがほとんど田んぼなので、近くに家があるといつても、20メートル、30メートル離れた所なんです。だけど、お互い交流もありますし、回覧板が回ってきたり、野菜をたくさんもらったときに分けてもらった交流があったので、やっぱり近くの人とは交流があった方がいいなと思いますね。

司会◎一人で生活していて困ることはありますか？

岸◎親から離れて自由なのは面白いけど、やっぱり実家を離れてみて洗濯だの食事だのっていうのは大変だなと思いました。

谷中◎部屋の模様替えをしよう

かなと思って、大きな机を動かそうと思ったんですけれども動かさなくて……。実家にいたときには祖父もいたし、父もいたし、高校生の弟もいたので、やっぱり力仕事系が大変ですね。

大野◎入学して引越したばかりのころに、スーパーでレタスを買って冷蔵庫に入れていたんですよ。次の日の朝にお弁当を作るのに出して開けたら、その中からカエルが出てきて、もう、その時は本当にパニックになって……。まだそんなに仲のいい友達もいないので、福岡にいる友達に電話して、でも、「えっ、どうしようもない」って。それで半泣きになりながらティッシュでカエルをつまみ出しました。

地元のうまいもの自慢を聞かせてください。

佐々木◎山形は、芋煮っていうのがあります。秋とか春の川辺でよく芋煮会っていう、芋煮を囲んで御飯を食べてお話をしたりします。その芋煮がまたおいしい。御飯を何杯でもいいける。これ、まだつくり方はわからないけれど、地元に戻ったら教えてもらいたい。

たいです。芋煮のすぐぐでっかい企画が山形ではあって、数百人分が賄えるくらいのもので、つかい鍋で作ります。そのときの「おたま」代わりがシヨベルカー、クレールン。あれですくうんですよ。

岸◎富山は魚、おいしいですね。でも、実家は海に面してなくて、町で一番有名なのは、毎年2月の頭の休みなどにふるまってくれる、クマ鍋とかイノシシ鍋です。それに友達と一緒に食べに行くと、いろんなところと交流がうまれる。おじいちゃん、おばあちゃんなどとも話す、いい機会になっています。

中村◎いやあ、島根は何もないかもしれない。でも、イノシシ鍋は確かに食べたことがあるな。あとは宍道湖のシジミかな。地元が日本桜名百選に選ばれていて、桜関係のものが結構あったりします。桜そばとか、桜麺とか。どうやって食すか僕もよくわからないんですよ。

青木◎僕の実家は柿農家なので、収穫期になるとサークルに柿を持っていくんです。すると、食べたことがないっていう人がいて、おいしいよって言うってくれる。

佐々木◎地元からサクラランボを

送ってきますが、あれ、どうも好きになれない。箱で二つくらい送られてくるので、大家さんに一つあげて、あとはサークルの人にあげたりするんですが……。

司会◎地元で食べていたものと東京のものが違っていて驚いたということはありませんか。

大野◎東京の刺し身が柔らかいと思いました。昔、いとこが小さいときに大分にきて、刺し身が硬くてかめないって泣き出したことがあって、かえってびっくりしたけど。

司会◎身が締まっている、ということですね。地元の食べ物が東京では手に入らない、ということもあるでしょう？

中川◎黒はんぺんです。静岡では普通、はんぺんっていったら黒いんです。イワシなどの魚をすりつぶして作りますが、東京ではあまり見ない。最近、スーパーで、売っていることもあるけど、やたら高かったりする。

司会◎静岡といえば、おでんが話題になっていますね

中川◎東京の人にすごく驚かされるのは、静岡ではラーメン屋さんにも、駄菓子屋さんにも、おでんがあることです。私は東京

ではあまりおでんを食べないの、よくわからないんですが、おでんですごく驚いたのが、白いはんぺんが入っていたこと。静岡では普通、白いはんぺんはおでんに入れないので、初めてセブンイレブンでそれを見たときには、丸い形をしていたので、肉まんが入っているのかと思った。

榊原◎地元愛知だと、おでんにはみそが付いています。東京に来て、おでんを買ったらみそが付いてなくて、ちょっと残念。

司会◎食文化は地方によつて独特なものがありますね。

大野◎おしょうゆの味が違うので、いつも送ってもらっているんですよ、実家から。

地元の言葉はどうですか。

青木◎僕は岐阜県人会の学生寮に住んでいるので、その寮に入ると岐阜なまりになります。毎日。だから、なかなか直らないんですけど。このあいだ、教育実習で岐阜に3週間戻ったときには、東京に戻ってもしばらく直りませんでした。

大野◎普段、ずっと大分弁でしゃべっています。敬語だと標準語な

ツクエ!?

学芸大のタヌキ (ホンモノ!)



んですけど。

司会◎大学で友達と話す時も?

大野◎もう、ずっと大分弁です。

司会◎その方が自分らしくていいと思ってる?

大野◎大分弁、結構汚い。だから標準語の方が女の子らしいと思うんですけど、自分がそれをしゃべっているのが気持ち悪くて。でも、実家に帰ると、やっぱり混ざるらしくて、家族から「標準語!」って言われます。

佐々木◎山形にいたときにも、あまりなまっではいなかったの、そんなに変わったっていうのはないんですけど。地元の電車通学の女子高生はすごいですよ。んだす、んだす。って。同意する言葉ですけど、そういうのが、ぼんぼん飛び交っています。単語でちよつと困ったのが、山形県って、①、②のこと、いしまる、にまる。って言うんですよ。まるいち。じゃないんです。これは、たぶん山形県人の8割は標準語だと思っている。(1)は、いちかつこ。予備校のとき、東京から来た洗練された先生が「かつこいち。って使うじゃないですか。それに最初は戸惑ってしまつて、全然ノートがとれなかったと

きがあった。

中村◎すつごくびっくりしたことがあった。これ絶対に標準語だと思っていたんですけど、「チョウカンボウ」っていう言葉なんですけれども。

司会◎「チョウカンボウ」?

中村◎それが全然伝わらなくて...。お腹の方からくる風邪を腸感冒って言うんですよ、出雲弁で。3年になつて気づいたんですよ、つい最近。サークルに、もう一人島根県民がいて、その人から聞かされたんです「腸感冒って、標準語じゃない」って。あと、かぐる。「あれ、これ、伝わらないな」って。ひつかく。っていう意味。そう言ったら「えっ何?」って言われて、こちら「えっえっ何?」て聞き返しちやたんですけど。

中川◎あと、たくさん人がいて、二つに分かれるときに、静岡だと「くつとつば」って分かれるんですけど、それが結構、地方によって違うみたい。

青木◎岐阜では、グッチーって言うって、グーとチョキなんです。それが、全然通じなくて。

佐々木◎山形は、うらおもて。うーらーおーもーってつの

て。って言うって、これで決める。榊原◎うちも、やっていましたよ、これ。

谷中◎栃木では後ろのことを裏って言います。教育実習の時、黒板が前と後ろにあったので、「裏黒板見て」と言っちゃうと、「へっ、何、先生」って。「ごめんね、後ろの黒板、見てね」って言い直しました。

青木◎掃除のとき、机を前に出すことを「机をつる」って言うんですよ。運ぶこと。

佐々木◎「まろつ」といってね。って言う言葉。新聞紙とか雑誌を重ねていって、ビニールテープなどで、しばる。それを「まろつ」といってね。って言うんですよ。

身近に同郷の人がいるとホッとするとか、そういう仲間がほしいとか思うことはありますか。

佐々木◎サークルに1人いるんですけど、さっきの芋煮ネタが通じて、東北出身の人たちと一緒にやろうみたいな話が出ました。

青木◎僕、中日ファンなんですけど、県人寮だから、周りは全員中日ファン。盛り上がります。

司会◎皆さんは、大学の中に自分と同じ県の出身で、どういう人がいるか知っていますか?

榊原◎静岡とか、岐阜とかは周りにすごくいるんですけど、愛知だけいないですよ。

中川◎学科の中は把握しています。

司会◎それは、何でわかったの? 中川 同じ学年で、入学してすぐのころは、まだ話題がないので「どこ出身?」って。

司会◎福井は?

梅田◎知らない。

司会◎富山は?

岸◎サークルにはいます。

佐々木◎学科内は広島が3人いたりするけど、学科によって、違いがあるみたいです。全体的にどうかわからない。

司会◎県人会のような集まりがほしいと思うことはありますか。

青木◎今、県人寮にいますが、割と便利だと思います。一緒に帰省することもできるし、帰省してから遊ぶこともできるんです。メリッとはいっぱいありますね。高校時代からの友達も寮にいて心強いし、一緒に同窓会などに行ったりしました。



司会●自分の県も県人会があったら、行ってみたいと思いませんか？

佐々木●兄貴が国立に住んでいるのですが、その商店街で県人会の方が芋煮をするんですね。それを食べに行きたいと思っています。

中村●島根出身の人はサークルに1人います。地元から東京に来て、連絡が取れるのは、東京都内だと2人です。県人会があったらうれしいですね。ただ、島根県は東部と西部で、だいぶ環境が違いますから、できれば東部の方にいっぱい来ていただきたい。

大野●私は大分出身の人と直接話したということは、一度もないんですよ。1年生にいて聞いてるので、その人とすぐく接触したいですね。

最後に、皆さん、お互いに聞いてみたいことはありますか。

佐々木●じゃあ、地元の駅は、何分に1回、電車が来ますか。うちだと、1時間に1本。友達に、「今日、何時の電車で帰るんだ」って聞いて、「8時の電車」って言う

たら、時間がわかる。8時5分の電車の次は、9時20分。取り逃がした場合、駅ですと待たなければいけない。時間帯によっては1時間半くらい待たなければいけない。

中村●僕の所は、1時間に1本、走ればいい方です。夜の時間だったら、途中で1本あるかないかです。何時1本、何時ゼロ本って、そんな感じなんです。終電は7時です。その上、僕のうちはその駅からさらに遠くて、そこに行くまでにバスを使わないといけないんです。ところが、そのバスが2時間に1本しかなくて、終電よりも前に終わるんですよ。そうすると、どうしようもない。

梅田●僕は福井駅前のすぐ近くなので、電車は20分に1本くらいは出ています。

谷中●私は宇都宮なので、20〜30分に1本は、東京行きが出ていますけど、宇都宮より北に行くとうとすると、1時間待ちになる。

青木●僕は、電車が廃止になって、だいぶ苦しくなりましたね。岐阜まで出るのは、もう手段がなくて。

大野●私は大分市の中なので、20分に1本くらいは通っているん

ですけど、駅自体はすごくちっちゃくて、券を買う所と、待つ所ぐらいしかない感じですね。

岸●1時間に1・2本です。土日になると、1時間に1本になって、結構、不便でした。

榊原●うちは、近くの駅が高校に上がる前に廃止してしまつたので、ちよつと遠めの西尾駅まで自転車で行っていました。隣の西尾口っていうのが最寄りなんですけど、普通電車しか止まらなくて1時間に2本。西尾駅に行つた方が早く名古屋とかには行ける。

中川●静岡は、JRの東海道線があるので、それは大体10分待てば確実に来る。あと、静岡駅と清水駅の間に、静岡鉄道っていうのが走っていて、それはたぶん3分おきぐらいに出ている。

司会●待合室みたいな所で、話したり、話しかけられたりということはありますか。

大野●電車の中でも、おばあちゃんに話しかけられることがよくあります。

佐々木●よく、酔っぱらいにかられますね。友人と一緒に乗っていた時に二人のおじさんにかまれて、僕は先に降りてしまつたんですけど、友達は結局、最後

の駅まで一緒にいたということがあった。

司会●毎朝、同じ列車に同じ人が乗ってくるということがあると、恋が芽生えたりして・・・

佐々木●芽生えました。1・2年告白しようかと思つたんですけど、時間が過ぎ去り・・・どこかの車両に行つたんだと思うんですけど。

司会●大分はなかった？そういうことは。

大野●交通がすごく不便なので、バスか自転車で行っていました。大分は車がないと、どこへも行けないんです。

司会●今日は、短い時間でしかけれど、各地の話をたくさん聞かせていただきました。これを機会に学内で出会つたら、ただすれ違うのではなく、一緒にお茶を飲んだり、あるいは御飯を食べたりして、交流を深めることができればいいですね。今日はありがとうございました。

司会 真山茂樹
記録 古瀬政弘・鳴海多恵子

@ 地元も東京なので、東京で就職します。
ただし、就職できたら、何年目かに奥多摩か島嶼に異動希望を出す可能性が高いです。それでも、東京であることには変わりはないです。

@ 私の地元は兵庫県の田舎ですが、地元には多分戻らないかも…。東京か神戸辺りで就職できたらいいなと思ってます。

3

NYUKAISHA
SUU

平成
16年
~
19年

7

「卒業後は地元に戻りますか？」

この夏、試行運用した

辟雍会のソーシャルネットワーク

システムに書き込まれた、

在学生の声を拾ってみました。

地元を愛する熱い言葉が

幾つも見つかります。

4

2

ACCESS

@ 絶対帰りたいです。新潟大好きなので。東京には色々な経験をするために来ました。とても勉強になっています。ただ、ここは私の住む場所ではないんです。年月を重ねるごとに、卒業後は地元へという想いが強くなりました。今は、少しでも地元の役に立てるような仕事をしたい、と思っています。

@ 帰ります。地元は北国。ちょうど良い避暑になりますし、祖父や祖母に顔を出したいです。あと浪人した悪友をいじり倒す為にもちゃんと帰ります。地元だからとか故郷だからとか愛郷の念は、何だかんだであるみたいです。

@ 帰りたい!! でも、それよりも自分のやりたいことができる場所のほうが優先です。今のところそれがどこなのか決まっていのですが...

@ 帰りたい!! けど地元はいまだに就職氷河期らしいです。仙台あたりでJターンになるのかな...

@ 戻りません。ほぼ確定。もともと幼少期には東京に住んでいたし、地元鹿児島にはたまに帰ればいいかなって思っています。東京でいろんな経験して、老後に地元でのんびり、なんて考えてます。

@ 地元（埼玉）から通っていて、埼玉の教員採用試験を受けているところです。

でも、周りから「なんで東京にしなかったの?」とよく言われて、ちょっとへこみます。東京の、島限定だったら、絶対そっちを受けたんだけどな...。地元は、地元の国立大が実権を握っているそうすね^^;

@ 戻りませんたぶん。東京の方が（今は）楽しい。結構皆さん地元で愛情持ってるんですね...自分が冷たい人間なのかなってちょっと思いました。

@ 帰るかどうか迷ってます。東京の方が就職先は断然多いし給与面でもよさそうな感じはします。ただ生活していけるか少し不安です。なので就職活動は地元と東京を考えてます。

@ ゆくゆくは戻りたいです。東京もいいけど、ど田舎もいいよー!!! 電車なんて走ってなくて、自動車です。しかも1両ワンマン列車が普通です。バスなんて3時間に1本しかありません。家の周りには、田んぼと畑と山と川しかありません。コンビニは夜10時で閉まります。しかもそのコンビニ行くのに車で15分かかります。でも!!!!!! 地元、愛してます。I LOVE 大分('-'*)♪大切にしたいものがいっぱいあります。残ってます。

@ 戻りますよ!! 地元が好きだから☆

@ 地元に戻ります。東京に来て良かったと思いますが、長く住むところではないとも同時に思いました。私はおいしい空気と、気持ちの良い空と、澄んだ水と、美しい山と、懐かしい思い出が残る、大好きな土地に戻ります。

@ 地元には戻らないつもりです! 就職を東京です思うので。私が目指している職種は東京に主な会社が集中してるんです。地元も結構近いので、就職してもすぐ帰れますよね(^-^)でも教師になる人はやっぱり地元へ帰ることが多いのでしょうか?

@ 地元は八王子（東京）ですが、地方（支社）勤務がいいなと思っています。四国か中国地方がいいな。自宅生なので、一人暮らしにあこがれているところがあります。就職したら独り立ちしたい。そのためには、自宅から通えないところに勤めるのが1番かと。郷土愛には自信ありますが（八王子サイコーです）、就職は新天地求めて羽ばたく絶好の機会だと思っています。

N

辟雍会入会者数

（04～07年学部入学生出身県別）

◎すべての県からの入会

平成16年から平成19年までの辟雍会学生入会者数3742名が47都道府県すべてから出身者として入会しており、入会者のいない県が一つもないところに東京学芸大学の地方への浸透具合が伺えます。

◎東京都出身者との比較

東京都出身者821名に対して、東京以外の出身者は2921名と全体の約78%の割合を占め、関東以外でも約半数が入会しています。今後、この状態で入会者が増えていくと辟雍会支部組織が活性化されていくことが期待されます。

◎県別入会者数ランキング

東京都が821名と1位で圧倒的に多く、続いて2位埼玉県《379名》、3位神奈川県《288名》、4位千葉《県155名》、5位静岡県《138名》の順となります。10位までが100名以上入会者数の関東及び関東周辺の県で占めています。新潟県《128名》が8位と奮闘しています。さらに北海道・東北地方の県別入会者数が平均より上位で、同じく広島県、福岡県、鹿児島県といった中国・九州地方からもほぼ平均以上の順位と健闘しています。なお今後、近畿地区の増加にも期待したいところです。辟雍会県別出身者数については辟雍会HPで御覧になれます。

（報告：幹事 古瀬政弘）

(http://www.u-gakugei.ac.jp/~dousou/news/map_info.htm)

これぞ天職

流転の中でたどりついた農家生活

【北海道】 米村牧場 牧場主

米村好朗（1986年 理科卒）

せたな町は函館から車で2時間半、日本海に面する豊かな自然に囲まれたところです。九州出身の私は今ここで黒毛和牛の繁殖農業を営んでいます。大学卒業後すぐに当地へ来たわけではなく、当時はまだ自分が本当にやりたい仕事は何なのかわからず迷っていました。アルバイトや営業マンを勤め1年ほどたったとき、大学の恩師から声がかかり、私立高校の理科教員として主に生物を教えることになりました。初めは、戸惑いもありましたが、気がつけば生徒に会うのが楽しくてしょうがない、教えるのが楽しくてしょうがない、と感じる毎日になっていました。教材や授業の準備のため、山登りや海や川に潜るようになり、生徒と一緒に



生き物の観察などをするうち、人の手の及んでいない大自然の中に、身を投じてみたくなったのです。一念発起し、勤めていた高校を辞めました。そして、カナダのピース川からグレートスレーブ湖を抜け、同国最長の川であるマッケンジー川を単身カヌーで下る冒険に挑戦したのです。総計3000キロメートル。大自然の中、ひとりぼっちの旅です。危険な目にも何度も会いましたが、素晴らしい体験をすることもできました。大きなクマに遭遇し、危うく襲われそうになったり、ネイティブアメリカンの人々とヘラジカを捕って解体し肉を分けてもらったり・・・波立つ瀬に手を打つ間もなくカヌーが進んでしまい、中一杯に水がたまり転覆すれすれのところを、手鍋一つで必死にかい出して助かったこともありました。また、8月に降る大雪を体験したり、美しいオーロラを眺めて一晩中カヌーを漕い

だり・・・そして北極圏のイヌビクという町までカヌー下りを続けました。日本へ戻ってからは、塾の講師となりました。小さな教室を任されましたが、補佐役の講師との協力により、28人しかいなかった生徒は、いつの間にか180人までに膨れあがりました。快挙といえるこの増加は、補佐役の講師との連携によって達成されたものでしたが、経営陣が補佐役の講師をリストラ解雇してしまったのです。それも、女性だからという理由で。私は人を大切にしない経営陣に嫌気がさし、塾講師の仕事を辞めました。群馬の高校で産休補助として数学を教えてみないかという誘いをいただき、4年ほど群馬県内の高校で理数系の科目を教えることになりました。塾に比べて生徒と接する時間が長いため、面白さとやりがい、改めて感じるようになりました。



教師の仕事はチームワークです。自分の受け持った授業はもちろんのこと、皆が切磋琢磨して、よりよい教育をしようという思いがなくては、学校全体の雰囲気や良くなることも、生徒のやる気を引き出し伸ばすこともうまくいきません。群馬での仕事はこの面で大変恵まれました。妻が北海道で就職することになり、私も一緒に北海道に移住



しました。ここでも教師を続けるつもりでした。ところが、たまたま勤めた学校の教員の方々と、教育に対する考え方が全く違っていたのです。「自分の理想や能力を存分に生かせる仕事とは何なのか・」悩む日々が続きました。そんなとき出会ったのが、畑作と牛飼いをしていたI師匠です。

70歳を過ぎてなお、トラクターに乗れば右に出る者がなく、大きな機械の修理も自力でやっしてしまうI師匠。その存在は輝いて見え、私も師匠のようになりたいと強く思ったのでした。

30ヘクタールの農地を借り、黒毛和牛の繁殖農家に

なることを決意しました。最初の1年は研修で、I師匠の畑を手伝いながら、機械の使い方や小屋の建て方、農家としての心構えなどを教わりました。

その年の中ごろに待望の黒毛和牛を購入しました。ところが、これと前後してちょうど国内で牛海綿状脳症（BSE）が発生し、黒毛和牛の価格が大暴落したのです。あまりの値段の安さに「もう黒毛をやめようか」という農家も出てきました。しかし、私は黒毛の母牛をどんどん増やしていきました。それは、牛を買いに行った市場近くの黒毛牛専門焼き肉店で、生まれて初めて最高級黒毛和牛の肉を食べたときの、驚愕のおいしさが脳裏に焼き付いていたからなのです。「日本人はこの味を忘れるはずがない!」という自信が私にはありました。

黒毛和牛はホルスタインなどと比べると小柄で、とても人懐こく、真っ黒でつぶらな瞳の可愛らしい動物です。子牛は子

ジカの様に足が長く、寒さなどにはほかの牛種より弱いため世話は大変ですが、ミルクをねだって跳ねる姿は、何ともいえずかわいらしいものです。

最初の数年間は和牛生産のほか、トウモロコシも作っていました。しかし、干ばつで芽が出なかつたり、すぐおいしくできた年はクマに片っ端から食べられて畑が全滅したり、台風で根こそぎ倒されたり、雑草に覆われたりで、労力の割に見返りは全くない状態でした。畑の土も悪く、一人でできる仕事量には、限界があるということを知りました。自分は畑作より動物を飼うことが好きですし、そちらに向いていると思い、今では黒毛和牛の繁殖一本に絞って牧場経営をしています。

母牛の頭数が増えるに従い、生まれてくる子牛も増え、子牛の部屋の糞出しが重労働となってきました。また、牛の健康管理に十分時間をかけるためには、設備の工夫や仕事の省力化が課

題となってきました。そこで、試行錯誤をしながら、仕事の動線の簡略化を考えたり、堆肥舎や新たな牛舎を、低予算で自力で建てたりしてきました。現在も子牛の健康増進のため、日光浴を十分にできる運動場つき子牛部屋の建設を敢行中です。

私の農家生活を楽しいものにしてくれるのが、入植したところから飼っている馬6頭（このうちの1頭で地域に回覧状を配ったり、農場や周辺の山の散策をしたりします）、ヤギ、羊、ミルクを与えて育てた黒豚（今は私を乗せて歩くほど大きく成長、テレビにも映りました）、そして、家族の一員として暮らす2頭の犬です。去年待望の娘も生まれ、日々かわいく成長しています。悩みは休みがないことですが、この仕事は私の天職だと思うようになりました。今では、親牛と子牛を合わせて50数頭の牧場にまで成長しました。これからも、美味しく安全な黒毛和牛を多くの方々に提供できるように頑張りたいと思います。

青春と郷里の自然を謳歌して

〔岩手〕 宮古市立千鵜小学校校長

細越 馨（1978年 理科卒）



私が、学芸大学に入学したのは、74（昭和49）年で、70年安保闘争に代表される学園紛争も落ち着いたあたりでした。長嶋茂雄が「わが巨人軍は永久に不滅です」というせりふを残して引退した年です。山口百恵の「ひと夏の経験」もヒットしていました。学芸大の正門のところで、百恵・友和の共演したドラマ「赤い・シリーズ」のロケをしたこともあるんですよ。

ふるさと宮古市

私が生まれたところは、陸中海岸国立公園の中心部、サンマ漁の基地、南部鼻曲がり鮭で有名な岩手県宮古市です。本州最

東端、東経142度、映画「喜びも悲しみも幾年月」のモデルとなった「とどヶ崎灯台」のあるところですよ。漫画「おいらんぼ」では、山岡が究極のメニューの一品「宮古のマグロ」を仕入れに訪れます。私の生まれた家は、海岸から100mメートルと離れていないところにあり、波の音を子守唄に育ちました。まさに唱歌「われは海の子」の世界です。太平洋の水を産湯につかい、そのせいか、まれに見る楽道家（自称）です。

30年前の大学生生活

当時、東北新幹線はまだ開通していませんでした。宮古から盛岡まで山田線で3時間半、盛岡から東京までは、特急に乗れば6時間半で行くのですが、貧乏学生なので、急行で10時間近くかけて上京しました。田舎で育った私にとって、何を見るのも新鮮で、毎日がとても楽しい生活でした。当時、創刊まもない情報誌「ぴあ」を片手に新宿や渋谷、有楽町などに

出掛けて映画を観たりしました。秋葉原や神田神保町の本屋街にもよく出掛けました。暑がりな私が最初に手に入れた電化製品は、扇風機でした。

もちろん授業も楽しいものでした。オリンピックのドーピング委員会の委員長をされた小野先生の運動生理学の授業を受けたのも記憶に残っています。確か、筋肉には遅筋と速筋があり、その割合によって運動特性が決まる、などという内容でした。理科では、植物実習や地学実習など泊まりがけの実習があり、いろいろなところに行くのもまた楽しみでした。伊豆の筑波大学の臨海実習所に泊まりこんで海藻の標本を作ったり、ウニの受精と細胞分裂の観察をしたりしたこともあります。芸術では、映画制作をとって「鳥になった少年」という題で、新宿の紀伊国屋の前や、鎌倉の由比が浜でロケをしたりしました。また、同級生の友達にも恵まれ、闇なべをしたり、あちこち旅行に出掛けたりしました。そのほか学

生時代にしかできないことを思いつきやって青春を謳歌しました。何人かは卒業してからも宮古に遊びにきてくれました。

私の学校

卒業以来30年の月日がたとうとしています。現在勤務する、宮古市立千鵜（ちけい）小学校は、児童数28名教職員数9名のとても家庭的な学校です。「とどヶ崎灯台」の近くにあり、本州最東端の小学校です。校長室から眼下に太平洋をのぞみ、岩礁の上ではミサゴが子育てをし、岬のアカマツの枝ではハヤブサが羽を休めています。浜辺には、ハマナスやスカシユリが見事な花を咲かせています。子どもたちは地区民や漁協のお世話をいただいてワカメの種巻きから収穫、ホタテの耳つりや網かえなど海に関する体験学習をしています。アワビ・ウニの口開けには高学年の子どもたちも家の人と一緒に船に乗って海に繰り出します。



「生き物係」の実践

担任をしていた時の私は、いわゆる「山川先生」でした。さあ理科の観察だ、社会科の地域めぐりだと、子どもたちを野外に連れ出しておりました。今考えると生活科や総合的な学習の先駆けをしていた感じです。担任を持たない今は「生き物係」です。各学年の理科の野外観察の時間には、「歩く図鑑」としてついでに行きます。全校朝会では講話の最後に必ずその時々々の自然に関する話をしています。子どもたちは、何か珍しい生き物がいると私のところ

に持ってきます。つい先日もしトリガの仲間（アカハラゴマダラヒトリ）の幼虫（毛虫です）を持ってきました。私が手のひらにのせてから、子どもたちの手に移してやりしり込みしていた子どもも、次々に

手に乗せて慈しんでいました。また、校長室の前の廊下には「自然コーナー」を作り子どもたちの持ってきた生き物や私が採集してきた生き物を展示しています。基本的に、キャッチ&リリースで子どもたちや職員が見終わったら逃がします。最近では産卵間近のオオカマキリのメス、校舎の中に入り込んだオニヤンマ、ミヤマクワガタ、ヒメギス、ウマオイなどを展示しました。教頭の時から始めて10年以上実践しています。1年間に200種ぐらいの生き物を紹介しています。

岩手には素晴らしい自然が残っています。この自然の中で暮らしている子どもたちはなんと幸せでしょう。しかし、子どもたちは案外自分たちの周りの自然の豊かさに気づいていません。目で見ても耳で聞いても意識していません。そこで、なんとか子どもたちに自分たちの学校・地域の自然の素晴らしさを分かってもらいたいと思い、この実践を始めました。また、先生方

の指導の一助になれば、という思いもありました。

素晴らしき日々

今この原稿を書いている最中に、用務員さんの「キヤー」という甲高い声。校庭の端をニホンザル（離れ猿のようです）が悠々と歩いていきました。学校の近くにはカモシカ・テン・アナグマ・タヌキ・キツネ・リスなどいろいろな種類の動物がいます。通勤途上でツキノワグマを見たこともあり

ます。校舎の近くでは、イソヒヨドリが子育てをしています。冬になるとオオワシ・オジロワシといった海ワシが北の国から渡ってきます。「自然コーナー」の隣の海水槽には、ハリセンボン、クロソイ、イトマキヒトデそしてクボガイとその貝殻を利用したヤドカリが入っています。教室には「とかちゃん」と命

名された、カナヘビが元気に暮らしています。また、このあたりは、北限の植物と南限の植物、海岸の植物と高山の植物が入り交じっているところで、こちらにも楽しいんですよ・・・という訳で、子どもたち、職員、そしてさまざまな動植物に囲まれて幸せな毎日を過ごしている私です。

「岩手に、そして、宮古に、おでんせ！」



生活と仕事

【新潟】 木工作家

市川正和（1996年 美術科卒）



安塚に来てすぐのころ、東京からコンテナで材木が届くことになり、とても一人では荷下ろし出来ないで近所の方（力持ちそうな人）にお願いして手伝ってもらったことがありました。かなりの重労働だったのですが、帰りにお礼のお金を渡そうとしたら、「いらんいらん、そんなもの渡すならもう来ないぞー」と本気で言われました。その時は受け取ってもらえないのが不

思議だったのですが、今ではそのおじさんの気持ちがかかるようになりました。ここでは皆がお互いに助け合って生活しているのだと。

今、星を見ながらこの原稿を書いているのですが、つくづく「いいところへ来たな」と思います。いいところ・・・というのは便利だとか町がきれいとかそういうことでなく、こうして星がどこまでもきれいで、自分の作ったおいしい野菜を食べることができ、3人の子どもたちは毎日自然の中で遊び、学び、人は温かく情が深い。人間らしい暮らしと労働ができる新潟での暮らし。私にとって大切にしたいことが大切にできるところということです。

地域の方からはたくさんの方の知恵を教えていただきました。周りの人は生活のほとんどを、例えば大工仕事や山仕事、畑仕事は自分でやる。普通に仕事勤めの人もです。もしできなかったら手伝ってもらい、代わりに「今

日は夕飯食べていきなさい」と言って手料理でもてなしてくれます。冒頭にも書いた様に、持ちつ持たれつという人付き合いがあればお金なんてたいしたことではないんだよ、ということをお教えてもらいました。東京にいた頃は何でもお金だった。ここには何もなければ「すべて」がある場所だと私は思っています。

でもなぜ縁もゆかりもないこの土地へ来たかといえば、別にどこでもよかった。大学を卒業し研究生として大学に残って半年たったころでしょうか、「室内」という専門雑誌で「それを作った人の所を訪ねました。東京からほど近い埼玉の山奥で一人で山を切り開き自宅と工房を自分で建ててその人は暮らしていました。なんだか圧倒されてすぐに弟子にしてもらうことにして研究生を辞め、車で毎日埼玉へ通うことになりました。毎日の通勤は大変なので借家を借

りて住み、親方の元でいろいろと仕事を見せていただきました。仕事で一緒に中国へも行きました。「3年間は・・・」と思っていたのに1年もたたないうちに断念しました。自分の中の初めての挫折。職人気質の親方とのタイトな状況や、真冬に借家がガラス戸なしの障子1枚、五右衛門風呂に加え、ネズミが一杯の生活、唯一のお隣さんは女装が趣味の大男だったりして。もうストレスの限界を感じて（多分、許容量が小さかったのだろうけれど）辞めてしまつた。埼玉から引き上げるトラックの中で「今後どうしたらいいんだろう」と落ち込んだのを覚





えています。でもどうしても作る仕事でした。だからもうやるしかない、という感じ。その後非常勤講師と植木屋のバイトを1年間してお金を貯め、自分で仕事のできる場所を探しました。嫁さんの実家がある石川県でもずいぶん探しましたが、そして結局後輩からの紹介でこの新潟の廃校舎にたどり着いたわけです。今はもう合併してしまいましたが当時の安塚町

は人口4000人弱でしょうか、田舎の中の田舎、積雪は3メートル・・・木造校舎の用務員室で、ほとんどキャンプのように始まった生活でした。そして無謀にも結婚も同時にしてしまっただ。今では若い人が田舎に住むというのも多くなりましたが、私がここへ来たころは相当珍しいことだったらしく、周りの人には心配されましたね。「大丈夫ですか？」と何度聞かれたことか・・・(笑)でも好きなことをやれているんだし、みんなにやめろと言われてもやりたいことがあるっていうのは幸せだと思っていました。

小さいころからこの仕事がしたくて、大学に入ってから、もう1年の夏には研究室に入っていました。カンナの研ぎ方から道具の使い方、機械の使い方など先生や先輩から教えていただきました。材木の買い付けに皆で茨城に行ったのは今でも思い出すなあ、最高に楽しかった。世界の木が集まっていてスケールが大きくて・・・もう夢中でしたね。このせいで私は木のマニアになってしまった。今でもそこへ材木の買い付けに行っています。新潟だと「こんな木あるけど使えかね？」とお声がかかることも多く、古材も含め日本の木に目を向けることが多くなりました。

もちろん自分の好きなことを仕事にしたのだから、大変なことも苦労したことたくさんあります。ここへ来た当所は、作った家具をお金にする、つまり「売る」というのが一番大変な仕事でした。そのころは自分の足で「置いてください！」と東京のショッブを回ったり、それこそ全国のイベントに泊まり込みで参加したりして・・・1年の半分はどこへ出向いていました。きつと地に足がついてない感じだったと思う。でもあのころのバイタリティは、われながらなかなかのモノだったと思います。それにそのころ知り合った友人や仲間が、つながり

「同志を育てる」という思いを込めて …大学教育について改めて考える

【埼玉】 埼玉県立大学長

佐藤進（1978年 大学院障害児教育専攻修了）

私が勤務する大学は1999年4月に創立されたばかりの若い大学である。1学部5学科で構成され保健医療福祉分野の多くの専門職を養成することを目的としている。具体的には、看護師、保健師、助産師、理学・作業療法士、臨床検査技師、歯科衛生士、さらに社会福祉士や精神保健福祉士、保育士にいたる多彩ぶりである。また、昨年度からは養護教諭等の教員養成にも乗り出している。

近い将来、世界のどの国もまだ一度も経験したことがない未曾有の高齢社会を迎えるわが国にとって、保健医療福祉に関する人材養成は喫緊の課題である。しかし、それは単なる専門技術者を輩出するというのではなく、そういう時代における社会のあり方を模索し創造する人材を産み出すことでもあると考えている。すなわち、高齢者や障害者と共生する社会を支える価値観を創出する若者を育てたいという思いである。とはいえ、私は大学教育に関してさほどの経験

があるわけでもなく、もちろん語るべきうんちくなども持ち合わせていない。にもかかわらず学長に選出されその重責を引き受けたのは、私が歩んできた仕事と同様の分野に未来を託そうとする若い人たちの育ちを応援したいという沸々たる思いに背中を押される気がしたからである。

振り返れば、もう30年以上も前のことになる。突然「勉強しなければ！」と思いついたのは、本屋で書棚を見上げていた時のことだった。

当時の私は、障害のある子どもたちの小さな通園施設で働いていた。全国の大学に吹き荒れた「学園紛争」の嵐と、引き続く「70年安保闘争」にのみ込まれるように（いや、正直に言えば自ら飛び込んでいった）して過ごした学生時代を経て、ようやくたどり着いた職場だった。「心理学」に籍を置いていたとはいえ、勉強らしい勉強などしたこともない私にとって、障害をもつ子どもの「療育指導」

は思いつきと当てずっぽうに頼るほかはない難事業だった。

そんなある日だった。何か参考になる本でもと、遊びに出たついでに立ち寄った書店の「心理・教育コーナー」の前に立つてたぐさんの本の背表紙をながめながら、「どれぐらい本を読めば少しは仕事ができるようになるんだらうか。」と半ば呆然としていた。

まさにその時である。「勉強しよう」「仕事（をしているふり）をしている場合じゃない」という思いがひらめいたのは。たぶん、障害のある子どもたちとかかわる仕事は難しくても、面白いし、やりがいもありそうだ。一生の仕事にしてもいいかもしれない。

と、思い始めていたのだろう。だから、大学時代に全くといっていいほど勉強しなかったことを少し後悔していたし、子どもたちに申し訳ないとも感じていた。こうして探して当てるのが、まだ開設されて間もない学芸大学の障害児教育専攻の修士課程だった。

なんとか、入試にも合格する





ことができてからの2年間は、それまでの人生、そしてその後の人生のどの時期よりもまじめに熱心に勉強に励んだ。同級生たちは、当然、私よりずっと若い人たちばかりだが、みな学部時代の蓄積があるのだろう、私が一番「できない子」に思え、それもモチベーションの一つになったが、何より、勉強そのものが新鮮で楽しかった。この経験は、大学に勤めるようになってから学生に対して、本気で「勉強は楽しいぞ！面白いぞ！」といえる唯一の根拠になっている。

こうして、無事に2年を修了し、改めて障害のある子どもたちと向き合うことになった私は30歳をこえていた。ちょうど、以前働いていた施設の「園長」就任を要請されるのだが、おそらくは「勉強した」という独りよがりの達成感のせいだろうが、躊躇なくその任を引き受ける。以来、障害福祉の仕事がライフワークとなった。もっとも、その後は、仕事の興味も内実も、障害のある子どもたちの育ちや



暮らしを支えることができる地域社会づくりにシフトしていくので、大学院で学んだ障害児の心理学や教育からは遠ざかるのだが。

ともあれ、こうして私は一生の仕事となる障害福祉に打ち込むことになるのだが、埼玉県立大学の開設に伴いその創立メンバーの一人に迎えられ、大学と地域での仕事の二足のわらじを履くことになる。もちろん、学長就任後は、大学の仕事に専念していることはいうまでもない。

先に述べたように、少子高齢社会の急速な進行の中で、社会保障システムの持続可能性の追求は焦眉の急である。しかし、政府は財政再建を大義名分に給付抑制をはかるばかりで、わが国の年金、医療、福祉の先行き

は全く不透明であり大きな不安が渦巻いている。こうした中で、保健医療福祉の専門職たちの役割は、それぞれの地域で患者さんやサービスを求める人たちに十分なケアを提供し生活の安定と安心をもたらすことを通じ、こうした仕事の重要性を社会に訴求していくことである。また、その先に国や社会の姿がどうあるべきかという見識を身にまとうことも専門職といわれる人間には欠かせない。

私はそういう可能性をもった学生を送り出したいと思っている。大それたことを言えば、現場ですっと仕事をしてきた私が、この大学の学長としていささかもふさわしいとすれば、このスタンスにこだわっているからだと思う。

激しさを増す「大学間競争」の中で、ともすれば外へのアピールに目が向きがちであるが、大学は教師と学生の志が交錯する教育の場であることを忘れないと思う。

富山の教育アラカルト

【富山】 富山市立堀川小学校長・辞職会富山県支部会長

大岩久七（1972年 国語科卒）



14歳の挑戦 幼稚園職場体験

二 富山の教育を

出身の先生の数も増え、校長や教頭の増加はもとより、1つの学校に学芸大出身の先生が2人や3人いる学校が幾つも出てきています。学芸大卒業生が学校現場の指導者として大いに活躍する富山の教育事情の一端を紹介したいと思います。

支える豊かな自然とコンパクトな地形
富山県は、四季が明確で山や海など豊かな自然があり、県全体が体験学習のフィールドといつてよい素晴らしい自然環境にあります。
富山湾に浮かぶ雪を抱いた北アルプスのやまやまは絶景です。北アルプスから流れる雪解け水や雨水は豊かな森林を通り、急流河川によって富山湾に注がれ、ブリやホタルイカ、シロエビが踊る天然の生けすとなります。3000メートル級のやまやまが連なる立山連峰を仰ぎ、東西に伸びる北陸自動車道、南北に走る東海北陸自動車道など、富山県の東端の朝日町から西端の石川県境まで延長100キロメートルを1時間余りで県を横断できるというコンパクトにまとまった地形は、県内どの地に住んでも、日帰りで1日研修を可能にするという大きな利点を生み出しています。これらにより富山県では活発な教育研究の活動と優れた指導法がしっかりと根付いてきたと考えられます。

三 特色ある富山の教育あれこれ
かねてから教育会や教育研究会の活動を通して教員の自主的な研修が盛んであり、使命感を自覚した資質の高い教員が熱心に指導に当たっていること、さらには、積極進取で教育熱心な県民性が今も引き継がれていることなど、富山には、教育を支える豊かな風土が醸成されてきたように思われます。
どの県でも教育には力を入れ、いろいろな教育施策や教育活動が展開されていますが、わがふるさと、富山県特有かと思われるものについて述べたいと思いますが、限られた紙面の都合上、ほんの一部になることをご容赦願います。
(1) 校長も含め県内教員ほぼ100%の組織率の自主研修団体富山県小学校教育研究会
昭和24年、発足した自主的研究組織である富山県小学校教育研究会（以後、県小教研）は現

一 毎年、盛況な富山県学芸大OB・OG「獅子の会」親睦会
♪若草もゆる 武蔵野の♪獅子の星座の旗の下 希望輝くわが母校♪
8月18日、毎年恒例の「獅子の会」が開催され、今年も楽しみに酔いしれ、学生歌の大合唱が会場一杯に響きわたりました。昭和49年、4人で始めたミニOB会、今では会員300名近い数にまでふくれあがった「獅子の会」の親睦会です。学芸大の同じ釜の飯を食った者同士が学生時代にタイムスリップしたり、近況を語り合ったり、あるいは、学芸大の先輩やラジオ局のパーソナリティーを務める学芸大OGの講演を聴いたりしながらさまざまな情報を得、親睦を深め、私たちのネットワークがどんどんひろがっています。
富山県では学芸大の卒業生がどんどん増えるにつれ、学芸大

子「の会」の親睦会です。学芸大の同じ釜の飯を食った者同士が学生時代にタイムスリップしたり、近況を語り合ったり、あるいは、学芸大の先輩やラジオ局のパーソナリティーを務める学芸大OGの講演を聴いたりしながらさまざまな情報を得、親睦を深め、私たちのネットワークがどんどんひろがっています。
富山県では学芸大の卒業生がどんどん増えるにつれ、学芸大

在まで、60年近く、教科等の部会を構成し、授業実践を中核においた実践的・組織的な研究を継続して進めてきています。その熱心な取り組みは、本県小学校教育の充実に大きく貢献し、大きな成果を挙げています。県内を7つのブロックに分け、時には一堂に会し、年間10回程度、「実践資料を持ち寄り、子どもの姿で語ろう」を合言葉に、一人一人の会員が自分の教育実践に責任をもち、抽象論でない具体事例を持ち寄っています。みんなの知恵を寄せ合うことで、本県の教員の力量を高めていきます。公開授業研究会では、学芸大の各教科等の先生方に、講師として何度もご来県いただき、指導助言を賜っている経緯があり、感謝の気持ちで一杯です。

また、県小教研では、学力調査を昭和30年から実施し、県内

の3年生以上の全児童対象に、毎年（今年は53回目）4月上旬に行い、担任が学級の実態を把握し、今後の指導に生かす上で、大いに役立っています。したがって、多くの県教委が行っている学力調査は本県では行っていないません。（同様な県中教研、県高教研もあります）

（2）全国的にも珍しい社会に学ぶ「14歳の挑戦」事業

この事業は毎年、県内の中学2年生全員が、学校外で5日間、職場体験活動などに参加することにより、規範意識や社会性を高め、将来の自分の生き方を考えるなど、成長期の課題を乗り越えるたくましい力を身に付けることをめざしています。この事業の大きな特色として、「学校だけでなく、地域社会や家庭の力も合わせ、みんなで取り組み」ことを挙げることができま

す。なお、この事業はNHKテ

レビの全国放送「クローズアップ現代」にもとりあげられました。

（3）富山の教育を発信する特異な出版物

平成14年、完全学校週5日制の実施等、教育の大きな転換期に当たり、生き生きと輝いて活動している子どもたちや地域の方々から寄せられる率直な声等、教育実践に熱意をもって取り組んでいる各校の日常の様子を富山県小学校長会で収録し、発信したものが「富山の教育「ちよつといい話」」です。現在、第3集を編集集中です。

また、明治21年、富山県の教育の振興を図ろうと創設された富山県教育会が創設以来、機関誌「富山教育」を発行しています。教育世論の啓発を目的に、現在、886号を出版し、今や富山県教育の歴史を語り伝える重要な歴史資料となっています。

四明日に向かって

「獅子の会」は教員のみならず、県庁マン、銀行マン、マスコミ、企業関係者：等々、多士済々、親睦会ではいろいろな世界の話に花が咲き、会も一段と佳境へ、実に楽しい時間が過ぎていきます。夜もとつぷりと更けたころ、ようやく重い腰を上げ、明日からの互いの健闘を誓い合って、「獅子の会」の宴もおわりを告げます。



人生の秋に自己を見つめて

【鳥取】 曹洞宗興雲寺 住職

吉田廉士（1959年 音楽科卒）

人生という言葉の深さを、まだまだわからずに、間もなく70歳を迎えます。

小金井の麦畑の中を歩いた18歳の若造は、これまでの間に、実に多くの方に支えられ、助けられて、50年少々の年月を歩んでくることができました。恥ずかしくなる50年だったと思い、いまや弾くことも歌うこともほとんどない世界にいて、人生の残り時間を気にし始めています。

教師生活のスタートは、中学校でした。わずか5年でしたが、音楽の教師であることより担任教師として2度卒業生を送り出した経験は、今でも重みをもつて私の胸の中に残っています。そして小学校へ。2校15年間、専科ではなく担任として、全教科を教えました。すべての教科の教育実践書を片っぱしから読みました。一番苦手な授業は社会科の中の歴史。その中でも、いわゆる中世・近世でした。

当時、朝日新聞で、「いま学校で」という企画がスタートし、

1週間朝から晩まで、1人の記者が私の教室につめていたことがありました。その時の授業で、一番うまくいかなかったのが、戦国時代でした。

そのあと、東京都教育委員会の指導主事を7年、校長を4年、そして指導室長在任中にお寺の和尚になる決心をしたのでした。

18歳で東京に出て、56歳で再び山陰の山寺にもどる。その在京の38年間をしみじみと思ひ出します。

当時、練馬の大泉に学芸大学の寮がありました。寮生活は、「山家そだち」であり、「お寺のボンボン」であつた私に、一人で歩くことを教えてくれました。あのころ、ラーメンが安いところで35円でしたが、寮は朝・昼・晩の3食で60円。ごはんは全部外米。煮魚に蛆がはつていることもありました。

1部屋に3人ずつの生活でしたが、1年先輩に社会科専攻で沖縄出身の人がいました。本当に歴史を学んでいないことを、



この時痛切に思いました。本土という言葉も適切ではありませんが、復帰前なので、内地留学というシステムで来ていたのでした。もう1人は2年先輩で数学科専攻でした。教育行政にかかわるようになった時、本当に手とり足とりで教えてもらいました。

大学の1級上に、星野圭朗さん（注1）がいました。「ヤスシはなあ・・・」と言いながら、生き方の道案内をもらったと感謝しています。全国教育系

学生ゼミナールで、群馬、静岡、大阪、東京と歩いたことは、貴重な経験になりました。

もっと先輩に、渡辺学さん（注2）がいました。「仕方がない、ヨシダをつれて行くか・・・」と言って、美学の土田貞夫先生（注3）のお宅につれていってもらわなかったら、今の私はないと思います。

東京での教育に携わる仕事を4年残して、鳥取の中山間地の小さなお寺に入ることになりました。東京生まれで在家出身の



妻には重大な決断をさせたこと
になります。

父は、僧侶の道に在家から
入ったのですが、貧しい人た
ちの生活を良くするために、さ
まざまな努力を生涯続けて亡く
なりました。

そのあとへもどるため、56歳
で修行に行きました。専門僧堂
での私の「指導教官」は高校中
退の19歳。この1年間も、私に
とっては、大事な宝物のような
1年間です。

学ぶというのは、教えてもら
うことではない。自分から盗ん
で身につけることだったのです。

57歳で住職になり、平成16年
から3年間曹洞宗鳥取県宗務所
の人権擁護推進主事を命ぜられ
ました。

物心ついてからこれまでのす
べての経験がなければ、人権担
当の仕事はできませんでした。
子どもたち、お父さんお母さん、
仲間、そして児童相談所や警察
の少年係の人たち。ひとり一人、
すべての人に感謝する3年です。
た。

もどる時、私たち2人は、寺
のためだけでなく、地域の人た

ちのために残りの人生を・・・
と思っておりました。歴史の授
業が苦手だった者が、今、西日
本最大級の縄文遺跡と言われる
智頭枕田（ちずまくらだ）遺跡
の保存・活用の運動にも取り組
んでいます。

和尚になつて10年以上になり
ました。わからないこと、でき
ないことが減るどころか増えて
います。人生の残り時間がどん
どん少なくなっていることに不
安も感じます。

それだけに、静かに自己を見
つめて、僧侶の生き方、宗教の
あり方を求めつつ、歩んで行こ
うと思います。

（注1）故人。 本学音楽科同窓初
代会長、永く附属竹早小学校に
勤務の後、山形大学教授。オル
フの音楽教育など、創造的表現
に関する業績で著名。

（注2） 本学音楽科の昭和30年度

乙類卒、東京教育大学附属小学
校などを経て、熊本大学教授で
退職。現在は『天然木』という
表現集団を率いる。

（注3） 故人。 本学音楽科の恩師
で、音楽美学の専門家。音楽史
や美学の講義での、独特の語り
口が懐かしい。音楽教育への批
判も厳しい方であった。



UKUOKA

すべてが現在につながっている
— Quantize (クオンタイズ) —

【福岡】 ファッションデザイナー

中村展子 (2002 年 家庭科卒)

私は鹿児島実業高校を卒業し、99年に東京学芸大学に入学しました。高校生のころから服飾の仕事に就きたいという夢があり上京したいと思っていました。しかし一人娘の私への両親の希望はできれば地元、せめて九州。それならば、と服飾関係の勉強ができるようにとの思いから国立大学教育学部家庭科で探したところ東京学芸大学に出会ったのです。両親ともに教員ですのでもしかしたら教員に……という希望もあったのかもしれない。

1年生のころはラテンアメリカ研究会に所属し、浅草サンバカーニバルにも参加しました。ひと夏すべてをかけての衣装制作や練習、他大学の学生も合わせ数百人でひとつのものを創り上げるという大変貴重な経験をすることができました。

2年生以後は授業をうまく組み合わせてゆとりを作り、文化服装学院のオープンカレッジに

通い、専門的な服飾の技術を学びました。夏休みを利用してファッションショーや展示会を開き、オーダーを受けて一枚一枚自分で制作し、販売したりもしました。自分の作った服を喜んでくれる人がある、服を通して新しい人と出会うといった、

私が望んでいた学生生活のすべてを学芸大在学中に経験することができました。

しかし、すべてが順風満帆だと思っていた4年生の秋に、私の一番の理解者であった父を病気で亡くすという出来事がありました。父の看病や亡くなった後の母の精神的動揺を支えるために鹿児島〜東京間を往復する学生生活の中、郵送やメールのやり取りで卒論指導をしていただいた恩師の鳴海先生には大変感謝しております。そのときの卒論が「若者におけるオーダーメイドの在り方について — Quantize (クオンタイズ) の試

み」でした。そう、今の私のブランド名は大学在学中から決めていたものなのです。

Quantizeとは音楽用語で「ばらばらのリズムを組み合わせて最高のリズムを作る」という意味です。昔のデザインと現代のデザイン、さまざまな素材や材料を組み合わせて最高の一着を作りたいという思いや、それぞれの個性を持ったたくさんの人たちと、最高の服やショーを創り上げたい。そんな思いが込められています。

昔、老齢の詩人にQuantizeの意味を伝えたとこ、
「素晴らしい！僕だったらばらばらの言

葉を組み合わせて最高の詩を作るともいえるね」と感動してくれたのを今でも覚えています。

私はオーダーメイドの服でもできるだけ手ごろな値段にしたい、と考えています。なぜ、安い値段で販売したいのか、そして、もっと若い人がオーダーメイドを利用できるようにしたいのか、ということを4年生の時に鳴海先生に話したところ、卒業論文としてまとめるように言われ、前に書いたようなテーマに取り組むことになったのです。

昔は家の近所に手ごろな仕立





屋さんがあつて、特別な日の服はもちろん、日常着も気軽に仕立ててもらっていたものですが、現代の若者にとって、注文服は「高くてお金持ちの人が時間をかけて作ってもらうもの」という感覚です。自分のために仕立てられた服を持っている人はどれほどいるのでしょうか。自分だけの服に腕を通してみたことはありますか？

手ごろな値段で、体にあった気安いもの、好きなデザインの手にはいるという素敵な感覚をたくさんの人に楽しんでもらいたいという思いは今のQuantizeの理念になっています。

現在、Quantizeは、小学校からの同級生と二人で経営しています。彼女は学生時代から一緒に試行錯誤しながら、ショーを創り上げ、楽しんでた親友です。彼女となら夢を現実に引き寄

せることができるかもしれないと思っていました。彼女には彼女の人生があるし……と、誘いの声をかけるのを迷っていました。ところが、大学3年のときの突然の電話で彼女も同じ思いだったことが分かったときには鳥肌が立ったものです。

それからお互いに少しずつ準備を進め、販売員やニューヨーク留学、服飾専門学校で再勉強するなどの経験を経て、昨年、福岡でQuantizeを本格スタートさせました。

私が好きなことを仕事にしていられるのも、母親の理解、協力のおかげだと思っています。

Quantizeが本格的に活動を始めたある日、母から「今日からこの名前にしなさい」と「展子」の字をいきなり渡されました。デザイナーとしてよい方向へ進むようにと母が姓名判断で鑑定してもらってくれたのですね。突然のことに驚きましたが、「伸子」から「展子」になったからというもの、次々と仕事の

依頼がくるようになったのです。

N T T西日本のコンパニオンユニフォームデザインやファッションショーの企画運営、また、マスコミに取材を受けたり、テレビ番組内のリサイクルファッションショーへの出演依頼がきたり（最優秀賞をいただきました！）、なんと8月には福岡天神の真ん中にサロンをオープンすることができました。11月29日には福岡コレクションに参加します。

現在の仕事内容は、オーダーメイドの日常着やウェディングドレス、衣装制作、イベント企画運営が主です。今考えてみると学生時代にやっていたサークル活動や卒論がそのまま仕事になっているという感じです。

急速に広がっていく仕事に実力がともなう様にと、努力



の日々ですが、まだまだ先の大きな夢もつかみたくて、紅白歌合戦の衣装を担当できるようなブランドになりたい！と思っています。

追憶の中から ～「60 年安保」の頃

【沖縄】 沖縄国際大学非常勤講師

平良宗潤（1963 年 社会科卒）

沖縄はアメリカの全面占領下
にあり、パスポートを携えての
上京であった。入学式は世田谷
の本校講堂で行われたが、私は
セイロン(当時)やインドネシア
の学生と同じ外国人留学生とし
て扱われ、式場の最前列に座ら
された。沖縄はまだ施政権の及
ばない「外国」であった。名簿
も通常五十音順で並んでいたが、
私はどの先生の出席簿にも最



初めは食べられなかった。一月
8300円(文部省6200円、
琉球育英会2100円)のほか、
年間で被服費6000円、教科
書代6000円も支給されたか
ら、寮にいれば何とかやりくり
できるはずであった。
大学は1・2年の時は武蔵野
にある小金井分校で、3・4年
になると世田谷の本校に移るこ
とになっていた。この大泉寮か

後で、それが
特別入学の証
しでもあった。
B4・121
これが私の学
生番号だった。
最初の数ヶ
月は練馬の大
泉寮にいた。
一月分の食
費が600円、
一日20円で
朝晩どんぶ
り飯におつ
ゆ、おかずが
付いたが納豆

ら小金井までは吉祥寺までバス
で行き、中央線に乗り継ぐ方法
と、西武池袋線で池袋に出て山
手線の新宿へ、さらに中央線に
乗り換える方法とがあった。
吉祥寺まわりが距離的にも近
く、また料金も安く時間もかか
らなかったのに、そのころはた
だ定期券通学がしくて、しば
らく池袋・新宿経由で遠回りし
た。山手線全区間が20円、入場
券が10円だった。分校まで片道
1時間以上、時間も金もかかっ
たが、私鉄から国鉄(今のJR
線)への乗り換えや、乗降のた
びに切符を買わずに済む。改札
口に立つ駅員に定期券をさっと
見せて出入りできるのが何とも
うれしかった。
だが、三人一部屋の寮では、
同室者への気兼ねも多く、最初
の夏休みに分校近くの下宿に
移った。武蔵野にはまだ雑木林
が残っていた。駅から下宿まで
は畑地が広がり、冬には霜が降
り、霜柱が土を持ち上げている
のが珍しかった。ほおかむりし

た農民が麦踏みをするのもよく
見かけた。広い構内を横切っ
てどの教室に行くにも5分と要
しなかった。晴れた日には2階
の窓から美しい富士の姿が見え
た。弟が定期的に送ってくれる
沖縄の新聞がホームシックから
救ってくれた。
上京してしばらくは、東京駅
近くの丸の内ビルにあった琉球
育英会東京事務所へ月一回給費
を受け取りに行くだけだった。
いつもポケットには都内地図を
入れていた。その田舎者がいや
応なしに学生運動の洗礼を受け
たのである。「安保」と「全学
連」の語に接するとき、国会デ
モの続いた日々がよみがえり、
懐かしさがこみ上げてくる。
古い日記帳をめくると、
1960年の4月～6月には次
のような出来事が記されている。
4・26全学連の国会デモに
7000、清水谷公園8000。
5・10安保でクラス討論。5・
18学生大会で20日に全学スト・
デモ参加を決定。5・19警官



5000人を導入して会期延長、強行採決。5・20授業放棄で朝から学内集会。10時半、校門は閉鎖され、ピケ隊がスクラムを組む。国会裏門までジグザグデモ。6・3〜4小金井電車区のアイク訪問（徹夜）。6・11第18

次統一行動に参加（四谷↓国会↓自民党本部↓首相官邸）。

6・15全学連主流派が国会乱入、警官隊と衝突死者を出す。6・16緊急学生大会で学内騒然、授業放棄して講堂へ。全学無期限ストで起とう、国会・警視庁へ抗議デモ。新橋で解散。20時半アイク訪日中止を聞く。6・17スト決行1日目、全学集会後クラス討論。小金井駅までデモ、駅前で集会。6・18安保自然成立の日。10時ごろからデモへ。6・23学生大会でスト中止。

「60年安保」は私にとってまさしく「青春の焦燥」のときであった。授業放棄で学内集会へ。そして学友と共に国会へ。生まれて初めて参加するデモに感慨を覚えながら、雨の中をジグザグに走る。学生服のまま、覆面もヘルメットも無い。「ワッショイ、ワッショイ」「アンポ、反対！」「岸を、倒せ！」。請願権の行使としてのデモは何日も続いた。国会突入、樺美智子という女子学生

死を招いた6・15流血デモの結果は下宿に帰ってテレビを見るまで知らなかった。

安保は成立したが岸内閣は退陣した。沖縄を訪問したアイクが県民の抗議デモの前に、慌ただしく立ち去ったとのニュースが伝えられたとき、安保の向こうに沖縄があること、安保改定反対闘争と沖縄返還闘争は不可分であることを実感した。

●平良宗潤氏プロフィール

沖縄県糸満市生まれ。沖縄戦では山原に避難して戦火を逃れたが、防衛隊の父や多くの係累を失う。米軍占領下の沖縄からパスポートを携えて上京。59年入学。「国費留学生」は帰省し

て給費を受けた年数だけ指定の職場で働くことが義務づけられており、首里高校を振り出しに、知念、南部商業、真和志、糸満と38年間高校の社会科教師として勤務。01年定年退職後、沖縄県歴史教育者協議会、糸満市史編集委員会などの長を勤める。



「高知支部設立へ向けて」 きっかけはドイツ語と理髪店

中山泰志 高知県立高知丸の内高等学校教諭（1990年数学科卒）

私は、大学を卒業したら高知に帰り教員をする、という強い意志をもって東京で4年間を過ごしました。40歳となり今思うことは、高知に帰ってきて本当によかったということです。学生時代は帰省のたびに、早く東京へ戻りたいと思っていましたから不思議なものです。

学生時代は、小金井駅より小金井街道を清瀬方面に徒歩15分ほどの本町3丁目と桜町の境にある奥村荘というアパートに下宿していました。その近くに、ダンディーな高田和彦さんと美人な奥さまと2人で経営されている『おしゃれサロントカダ』さんがありました。私は大学の4年間、一度も散髪で浮気をすることがありませんでしたが、その縁あって、

高田さんとは今でも年賀状のやりとりをしています。また、高田さんの親せきの方が新潟県魚沼でコシヒカリを作っておられるのですが、そこから毎年10月ごろ新米を送っていただいています。そのころ高知は、針木地区で作る新高梨（新潟の梨と高知の梨をかけあわせた梨）の収穫シーズンですので、高田さんにはこれを毎年お返しに送って賞味してもらっています。

さて、2年生から3年生へ進級する時、単位数不足になると進級できない制度が私の時代にはあ

りました。当時の制度で、Cは単位修得となり合格となったのですが、Dだと次年度以降に再履修しなければいけません。ところが、1カ所、『ドイツ語Ⅱ』のところに、Dがついているではありませんか。

同じD類数学科のクラス仲間は、Dではなく、Cがついていました。前日、すかいらーくで同じように勉強したのに……。ショックでした。どうしたらよいか大変困りました。たまたま、B類数学科（数学の講義は同じ教室で受けていました）の3名が、ドイツ語ⅡがDで、来年、誰のドイツ語Ⅱを再履修するか、授業の合間に相談していたのです。自分も仲間に入れてもらい相談しました。その結果、驚山のドイツ語Ⅱがよいとの結論に達したのです。そして、翌年はなんとかが一度も休まずに出席をして、鬼門『ドイツ語Ⅱ』の単位を修得することができました。驚山先生に感謝。

卒業後、高知県の高等学校教員として郷里へ戻りました。それから月日がたち、05年5月のこと、家で晩酌をしていると9時ごろ電話が鳴り、東京学芸大学の学長の鷺山ですが……高知県に東京学芸大全国同窓会支部の設立を依頼する趣旨のお話です。びっくりしました。どうして自分のところにわざわざ学長が電話をかけてくださったのか。鷺山学長と私の接点は『ドイツ語Ⅱ』だけだったはずですが、

ところがもう一つあったのです。それはなんと、あの『おしゃれサロントカダ』さんでした。実は学長も時々、同じサロンへ散髪に行かれていて、そこで高知県に私がいることを紹介されていたのです。

07年6月24日（日）高知市で鷺山恭彦学長と金沢育三辞雅会副会長の2名を迎え、高知県在住の東京学芸大同窓生15名が集まり、『高知辞雅会』を設立することを決めました。まだまだ多くの同窓生が県内にいますの



で、あせらず、地道に声かけをしていきたいと思います。高知は、会をする＝集まる＝お酒＝宴会、ですので、12月ごろ正式に規約を決め、ま

じめに出発したいと考えております。鷺山恭彦学長、金沢育三辟雍会副会長、遠いところ本当にありがとうございます。

「支部設立の勧め」

金沢育三 辟雍会副会長・東京学芸大学自然科学系教授

国立大学であった東京学芸大学が独立法人化になる時期に合わせて、東京学芸大学全国同窓会である辟雍会が設立されました。これは決して偶然ではありません。国立大学時代はいろいろ規制はあるにせよ国家に保護されていたわけです。独立法人化後は、大学自ら自立し発展させていかなければならない状況になっております。実際国から大学への運営費交付金は毎年減らされ、人員削減を余儀なくせざるおえない状況になっております。

このような難局に対し、東京学芸大学の教職員、在校生のみならず、卒業生の皆さまと作るヒューマン・ネットワークはかけがえのない力となるものです。私は独立法人化にとまなうこのような危機に対し悲観はしておりません。歴史が証明しているように、危機はまさに飛躍へのチャンスでもあるのです。辟雍会の組織も少しずつではありますが整備されてきております。本年6月に高知で開催された辟雍会高知支部設立の会に鷺山学長と出席できる機会に恵まれました。高知における卒業生の活躍とそのパワーに驚かされました。教員としての活動はもちろんのこと、新しくNPOを設立し、新しい活動分野を創出している方もおられました。支部設立を推進することにより、辟雍会を通じて各地の独立した本学卒業生の活発な活動を有機的に結びつけることが可能となります。このネットワークは大変強力なパワーとなるものと考えられます。支部設立の推進は卒業生の皆さまの活動と親睦の輪を広げるのみでなく、東

京学芸大学にとっても重要な意味があると思われます。大学にとって最も重要な役割の一つは、いかに全国から優秀な入学者を確保し、彼らを教育し、有為な人材として社会に送りだすかであります。ある大学の成功例ではありますが、毎年あるひとつの県を指定し、その同窓会支部と大学との共催でその県で大学の教員や卒業生による講演会やスポーツ講習会を開催するとともに、大学の説明会を同時に行い広報を進めるというもので、現地の準備と活動は同窓会支部メンバーのボランティアに依存しているようです。その県で毎年開催されるわけではありませんので、高校生やその保護者のみではなく、小中学生まで対象を広げる必要があります。本学でも、辟雍会支部の設立が進めば全国から優秀な入学者を集めるため、このような各地区での地道な大学の広報活動も可能になるものと考えられます。また学生の就職という観点からも、同窓会支部は非常に重要な役割をはたすものと期待されます。学生がその地区の学校や企業に就職を希望する場合、その地区の同窓会支部を通して現地の詳細な情報を得ることが可能となります。

現在、東京学芸大学を取り巻く環境は非常にきびしいものですが、教職員、在校生、卒業生の皆さまとのヒューマン・ネットワークを生かし、逆に本学の飛躍への足がかりにしたいと考えております。そのためにも辟雍会組織の充実、特に各支部の設立は非常に重要であります。

の前に集まった。学芸大からも牧山助友事務局長、神田外喜雄総務部長以下20数名の皆さんが参加した。石川嘉延静岡県知事も夫妻で参加。

「楽会とは素晴らしいネーミング。酒を飲みに行くはダメといわれても、楽会に行くでは反対しようがない」と笑わせ、「素晴らしい会だ。地域活性化に大いにがんばってほしい」と祝ってくださった。いろんな職種の人が参加し、新酒と春の食彩を楽しみつつ、フランクな交流が盛り上がった。

田植え、稲刈りに山崎智、小田麻子、田中愛さんが参加して歌ったが、この宴には横山里江子、小関志然さんも新たに加わって、オペラのアリアや日本の歌を、中溝ひろみさんがジャズを披露した。

翌日の新聞には「遠州一円に名を馳せた名酒『花の香』、130年ぶりに復活」と出た。地元テレビ局も会の様子を流し、ついでTBS全国ネットで放映されたらしく、学内の先生方や文部科学省の皆さんからも「見ましたよ、面白かった」とずいぶん声をかけられた。

学生たちとのかかわりで

うしたプロジェクトには活動家が不可欠だ。ここ数年、本学の学生と当地との交流からそれは生まれた。宮沢賢治『セロ弾きゴーシュ』の公演を本学の加藤富美子ゼミの学生たちがやった折、三つの小学校合同の鑑賞会の実現には、地元の郵便局長をした青野貞紀さん、町会議員だった鷺山哲郎さんが大きな力となった。

音楽科の学生のオペラ「コシ・ファン・トッテ」は、ヤマハに勤めていた柴田康司さん、中学校長の中田和明さんがお膳立てをして、公演を成功させた。

篤農家の相沢泰さんや助役をやった川口功さんは、本学に菜の花・ひまわりなどの種まきに来たり、附属幼稚園のホタルの飼育指導もしている。

こうした流れの人たちが「花の香楽会」へと集まった。楽会は役場に勤めている深谷孝さん、横山忠志さん、農協に勤めている杉浦清司さんがダイナモになり、前記の人たちに加えて、窯を持っている松田一郎さん、デザイン事務所に勤めている松本徳夫さん、そば名人で県に勤めている松本忠廣さん、土井酒造の中島三郎さん、酒屋の杉村政廣さん、田んぼの提供者の中谷和加美さんを中心メンバーとして動いた。

隣町在住で本学卒業生の書家大杉弘子さんとも知り合い、ラベルの字を書いてくださったし、竹内優子さんは『花の香』のイメージガールを勤めた。

敢えて名前を紹介したのは、「学生さんには大変お世話になっている」と辞雍会に入ってくださったからである。

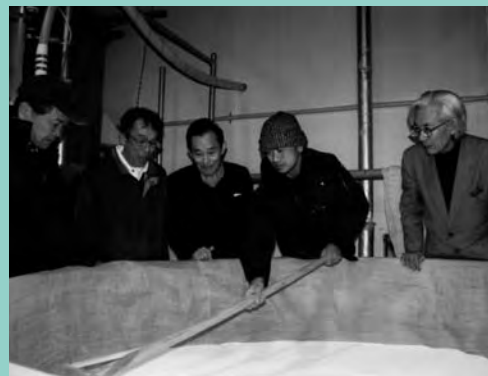
出合いの素晴らしさ

本学の学生の方が世話になっているのだが、古い街並みを活用した「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」には、加藤ゼミの学生、加藤愛子、深澤香苗、板垣順子さんが歌のライブに毎年参画し、町にしてみれば「偉大な文化使節」で、こんな大きな力添えはないという。

地域への思いを知って、参加した学生たちは「今まで考えてもみなかった。生まれ育った町を見直す観点をたくさん学んだ。将来に生かしたい」という感想も聞かれた。

あきる野市在住の本学2回生の田野倉訓郎さんは、地元の信用金庫に行った折、全国信用金庫協会が発行する『楽しいわが家』8月号に「美酒『花の香』よみがえれ」の記事を見つけ、楽会員になってくださった。

辞雍会でも、関心のある方は、是非、ご参加ください。





きっかけ

『花の香』を復活したらどうですか。『開運』で全国的に知られている土井酒造は静岡県掛川市の私の村にあるのだが、社長の土井清愷さんからそんな話があったのはもう10年も前だったろうか。『花の香』は、はるか昔、江戸の終わりにわが家で造っていた酒の名で、土井さんはその名前を知っていたのである。

多忙にまみれてずっとそのままになっていたが、たまたま昨年2月、何人が集まった折にその話が出て、「やろう、やろう」ということになった。話は膨らんで、「ただ頼んで作るだけではつまらない。米作りからやろう」という大きな話に発展した。

『幻の美酒』復活へ

直ちに「幻の美酒復活—花の香プロジェクト」と称する組織が立ち上がった。明治に入って売れなくなったから廃業したに違いないのに「幻の美酒」とはまさに詐欺だが、呼びかけは矢張りこうでしかない。

「地元酒復活、こんな夢踊る話を少人数でやるのはもったいない。酒米作りの田植えから、郷土史の洗い直し、地域の見直し、仲間作り、ラベルや瓶のデザインなど、人手とアイデアはいくらでも必要」と参加を呼びかけた。

知り合いに声を掛け、新聞やネットで募集すると、あっという間に300人の会員になった。知人が知人を呼んで静岡県下のみならず、愛知、長野、東京、神奈川、大分の人まで加わった。ネット時代の不思議さと威力である。会の名前を「花の香楽会」とした。

田植えと『花の香楽会発足の宴』

5月に「田植え」を呼びかけた。当日100人集まった。古戦場で知られた高天神城の麓の田んぼで、私も参加したが、実行委員以外は、ほとんど知らない人たちがばかりだった。隣で植えている人に聞くと「静岡銀行の支店長です」などという答えが返ってきて驚いた。「泥の感覚が素晴らしい」「野の風がたまらない」、いろんな職種の人たちが日曜日のひと時、田植えを楽しんだ。

田植えの合間に、「春の小川」「夏は来ぬ」などの歌声が田に流れた。参加した本学の学生諸君によるものである。

宴は、地元の春の食材を集め、御前崎産の初ガツオのヅケ、高天神コシヒカリ、章姫いちごと、地産地消、旬産旬消の大交流会となった。

『開運・花の香』の披露宴

1年の計画を「酒ごよみ」に作り、秋の稲刈り、マイ猪口・マイぐい呑み作り、花の香を仕込む蔵見学などを入れた。

酒の味を決めなければならない。杜氏の波瀬正吉さんに「やや辛口のコクのあるすっきりした味」と頼んだら、出来上がった酒が思ったとおりの味だったのには驚いた。酒ビンの色や形、デザインを皆で議論して決めた。

2007年3月18日、いよいよ披露の宴である。上天気に恵まれ、300人が土井酒造の酒蔵



師範学校の歴史

夏目漱石も、島崎藤村も教員生活の末に文学者として名を成した。漱石は松山と熊本で教員生活を送り、藤村は東京の明治学院女学校で英語を教えた後、恋に破れて仙台、そして信州・小諸で中学生たちを教えた。宮沢賢治は、25歳から30歳まで花巻農学校の先生をする傍ら、数々の名作を生んだ。まさに二足の草鞋を見事に履き続けたのだった。自らは教師の経験はないが、友人の話から着想を得て、田舎の教師の生活を

描いたのが、藤村と並んで自然主義文学の雄とされた田山花袋の「田舎教師」である。この「田舎教師」の主人公は、家が貧しいために上級学校に行けず、田舎の小学校の代用教員として働いている。東京に出て華やかに学生生活を送っている、かつての同級生をまぶしく眺めてうらやんでいるうちに、病に冒され、薄俸の生涯を終えるという物語である。「田舎教師」の文学的位置づけはともあれ、この主人公には明治末年の教育、そして教師生活の実態がよく描かれているように思う。この田舎教師は、師範学校は出でおらず、中学校（現在の高等学校）を出ただけの「代用教員」であり、校長から正教員の資格を取るよう熱心に勧められている。

「田舎教師」は、いかにも物悲しい物語だが、ここで教員の憧れ的存在であった「師範学校」つまりわが学芸大学の前身の成り立ちと歴史を、地方を中心にして眺めて見たいと思う。（遠藤満雄 1968年社会科卒）

制度が軌道に乗ることになる。わが東京学芸大学の発祥地は、この日比谷公園である、とは、先の「辟雍3号」の「歴史散歩―源流を訪ねて」でも触れたので、憶えておられる方もあろうかと思う。

わが母校はこの「教則講習所」を元祖として、のちに青山師範、豊島師範、大泉師範、女子師範、青年師範などが統合されて、昭和24

東京・日比谷公園……。高層ビルに囲まれた都心のだ真ん中であって、その緑豊かなたたずまいは、まさに東京砂漠のオアシスといった風情である。江戸時代は長州藩毛利家、佐賀藩鍋島家の上屋敷があったところを、明治維新後は、陸軍の練兵場として使われていた。その一角に設立された東京府庁内に明治6年、「教則講習所」なる施設を開設した。これがいわゆる「師範学校」の嚆矢であることは、東京学芸大関係者であれば、よく知っているだろう。明治維新というのは、さまざまな分野で画期的な政策を矢継ぎ早に打ち出していったが、とりわけ教育の分野の手早さは注目に値する。その前年の明治5年（1872）に学制頒布を行うと、当然のことながら、そこで教鞭をとる教師の確保が、大きな問題となった。当然教師の養成が急務となったのだった。「教則講習所」は、間もなくして（明治9年）、「東京府小学師範学校」と名称があらためられ、文字通り教員養成

年（1949）に「東京学芸大学」となったのだ。それはともかく、少し明治初年の教員の養成を含めて、地方の教育の様子に眼を向けることにしたいと思う。

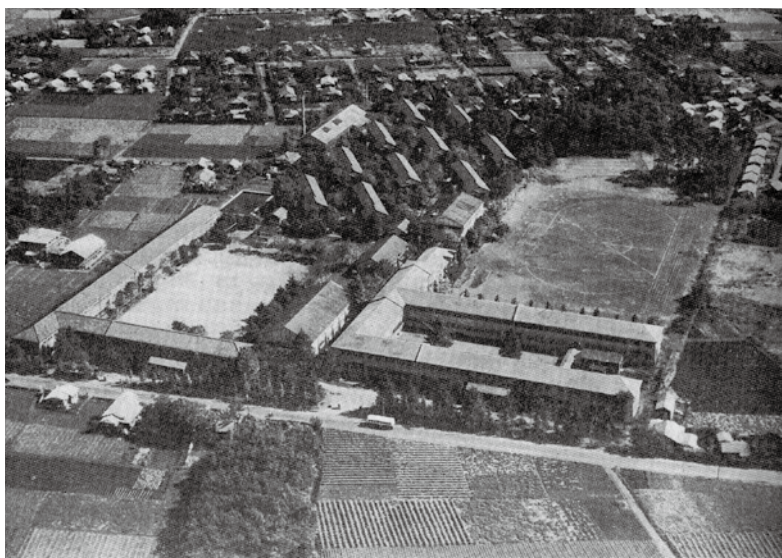
「日本史小百科 学校」（海原徹著・東京堂出版）の「師範学校」の項には、次のようにある。

教員養成制度の創設

明治5年4月文部省より正院へ提出された「小学教師教導場建立ノ伺」、またこれを踏襲した同年5月の布達「東京師範学校ヲ開キ生徒募集ノ事」さらに同年6月「学制着手順序」9項目の第2に付属する「教官教育所ノ定律」などを下敷きに、「学制」頒布の翌月、すなわち明治5年9月東京に官立師範学校（明治6年8月、東京師範学校と改称）注・日比谷公園内の府立小学師範学校とは別で、湯島の昌平坂

師範所内に置かれた。後の高等師範の前身）が発足、授業を開始した。教師には大学南校（東京帝国大学の前身）よりアメリカ人スコットを招き、校長は諸葛信澄、書記坪井玄道らが就任した。300余人の志願者より選ばれた54名の生徒は、学力の多寡によって上等、下等の二科に分けられ、教師は上等生に教授、上等生は下等生に教えるという一種のモニトリアル・システムが行われた。英語や算術の正科はスコットが担当、物理・化学・国語・漢文などの余科は日本人教師が教えており、その他、教科書、教材、教具などすべてをアメリカより輸入、事実上アメリカの小学教授法の直訳教育であった。

「全国師範学校の師範」、すなわち教員養成機関のモデル・スクールたることを期待されたこの師範学校は、6年7月第1回卒業生10名を出し、全国各地に派遣して教員養成の指導にあたらせたが、教育現場の需要の増大にはとても間に合わず、このため同年8月大阪と仙台、翌7年2月名古屋・広島・長崎・新潟の各大学区本部に官立の師範学校を開設した。いずれも各々の地方の教員養成の中心たることを期待され、卒業生はこのころさまざまな名称で応急的に設けられた教員養成機関のスタッフとなった。……



東京第三師範学校（今日この地に附属大泉小・中学校が建つ）

まずは師範学校の始まりについて調べたが、この師範学校も当然のことながら、明治新政府の「教育政策」の反映である。明治新政府はどんな教育政策を掲げたのかを、次に見てみよう。「日本教育史入門 学校と教師の歴史」（川島書店）は「国民教育の成立と展開」の章で次のように述べている。

・明治4年（1871）7月、廃藩置県が断行され、中央集権的国家体制の基礎が確立し

た。その直後に文部省が創設された。同年12月政府は箕作麒祥を筆頭格に、以下岩佐純・内田正雄・辻新次・長英・西潟訥・河津祐之・瓜生寅・木村正辞・杉山孝敏・長谷川泰・織田尚の12名からなる学制取調掛を任命して「学制」の起草に着手させたのである。約一ヵ月後にその大綱が成り、1872年3月には草案が文部省より左院に示された。草案作成にあたっては、欧米の教育制度がそのモデルとして参考にされたであろうことは、草案内容と学制取調掛の多くが洋学者であったことから容易に推測される。こうして財政の裏づけのないままに同年8月3日（陰暦）、「学制」は頒布されたのである。……

さらに「日本教育史」（石川松太郎著・玉川大学出版会）は、「学制頒布」後の状況を次のように記している。

・ムラの子どもから学校の生徒へ

・明治5年（1872）、「学制」が公布されると、文部省の教育政策は府県の役人から学区取締・区戸長、さらに警察の巡査も動員して新しい学校への就学を子どもたちに督促した。

「学制」は全国を8大学区に、1大学区は32の中学区に、1中学区は210の小学区に分けて各1小学区に1校ずつの小学校を設立する定

めであった。これは従来のムラの行政組織とは異なる新しい「学区」を単位として設けられたもので、長い年月、民衆が共同の基盤としてきたムラの生活を解体へと導くものであった。

学校への就学は、ムラの連帯生活の紐帯とされてきたムラのお祭りや講・お日待の行事から子どもたちを分断し、また子どもたち自身の集団生活を解体していくこととなった。のみならず祭礼の歌舞音曲や衣装、あ

るいは民間の諸行事をも「旧来の弊習」としてしりぞけ、ムシロを敷いた板敷きの上で生活する子どもたちは、アメリカの「ウィルソン・リーダー」直訳の教科書を通して、学校の教室で、まだ見たこともないベッドや野球の話を教えられることとなった。……

学制から計算すると、この学制頒布で日本中に一挙に53760の小学校が設立されたことになる。ムラの子どもたちがその小学校に通うことになったのだが、その子どもたちを教える教員の養成も急務となった。

先に東京・湯島の昌平学問所の中に設置された東京師範学校の第1期卒業生10人が明治7年7月、日本各地に派遣された、という報告を紹介したが、とてもこんなもので間に合うものではない。さらに大阪、仙台、名古屋、広島、

長崎、新潟に官立師範学校が設立されたものの、これとて急を告げる教員需要に追いつくものではない。師範学校出を待っていたのでは追いつかないので、読み書きのできるものは急遽教員に採用して、代用教員という形で急場を凌ぐはかなかった。

しかもである。明治10年、折から西南戦争が勃発し、その軍費をまかなうため、政府の財政

こうして、地方の教員養成制度がスタートし、学校制度もようやく先が見えるようになってきた。しかし就学率はまだまだで、今しばらくの推移を見なければならぬ状況だった。

その後、いくつかの小さな制度改革などはあったが、大々的な変更が行われたのは明治19(1886)年、森有礼が初代の文部大臣に就任してからであった。森は教員養成のあり方を制度面の改革はもとより、精神面を重視して「あるべき教師の姿」を高らかに標榜したのであった。

前出の「日本史小百科・学校」から再び引こう。

……普通教育の成否のカギは教員の人物如何にあると見る森は、さかんに人物本位の教員養成、良教師の養成を言うが、彼のいわゆる良教師とは「何程学科に長じ又其教授を善くするも、その人となり若し善良ならずんば其学科の

効能何くにある」というように、学力にプラスアルファした「慥なる人物」であることが要求された。

入学の方式としては従来の志願制に加うるに郡区長の推薦制を認めたのは、師範生徒に学力優秀はもちろん、それ以上に人格品性の拔群さ



寄宿舎自習室（女子師範学校）



東京府師範学校附属小学校の教育実習

を求め・たのである。

生徒の4年間の勉学の成就度を学力試験だけに頼らず、行状観察を併用し、しかも後者にウェイトを置いた。・・・

森は良教師の第一要件である行状優等の内実を順良・信愛・威重の三氣質ないし三徳性の如何によって見ようとした。・・・これらは単に学校社会だけではなく、教員の生きる地域社会ひいては国家全体に通用、妥当するものでなければならなかった。

三氣質の涵養のために森が採用したのは「教室外の教育」ですなわち全寮制寄宿舎の兵営化による訓育、および兵式体操である。・・・生徒の日常生活のすべてを兵営に倣うことによって氣質鍛錬、生活訓練の実を上げようとした。・・・

良教師にふさわしい有為の人材を国民全階級から選ぶため、完全無償制を実現したのも大きな特色である。学資はすべて公費とし、私費生を認めず、また「衣食住を支給して、教科書の貸与はもちろん、筆紙墨に至るまで悉く給与」、夏休みに帰省する際には小遣錢まで支給された。師範卒正教員の希少価値、社会的地位の高さもあったが、その完璧な給費制度が経済的理由で進学できなかった優れた人材を多数師範学校に集めるようになったことは想像に難くない。・・・

著者の海原徹氏は、森有礼の師範学校制度の

改革をこのようになり高く評価している。森は若くして欧米に留学し、廃刀令に命をかけたリ、伊藤博文の憲法研究を手伝ったり、明治新政府の改革の理論的支柱となっていた。明治の日本頭脳であった。ところが森はこの文部大臣就任の3年後、まさに憲法発布式典の朝、凶刃に倒れてしまった。主のいなくなった制度改革は次第に骨抜きにされ、あるいは形骸化されて、後の軍国主義教育に都合よく利用されるようになっていった。後から見れば、この森の改革こそ、日本軍国主義の元凶のようにも見るが、私は必ずしもそうは思わない。森の横死は、返す返すも残念なことであった、と切に思うのだ。

少し森有礼にとらわれすぎた。結論を急ごう。

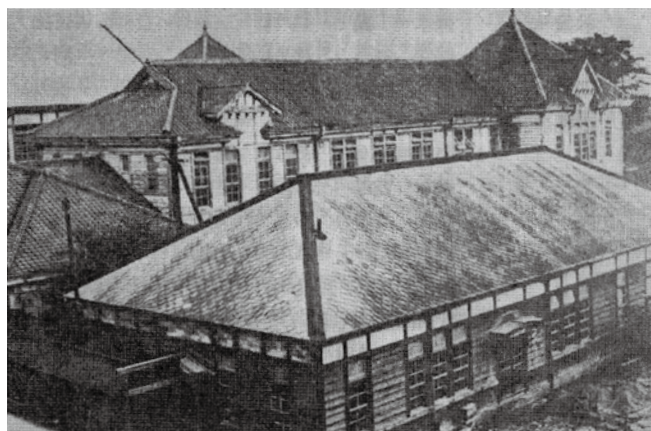
日清、日露の戦争を経験して、日本は国家の重要な礎として教育を捉えるようになり、それを支える教員の資質を重要視した。そのため、各都道府県に師範学校を置き、そこで大量の教員を養成した。その後に制定された教育勅語や、修身教育の徹底化などで、天皇中心の国家主義教育が、全国一斉に展開されることとはなったが、就学率の上昇、識字率の向上など、日本人全体

への普通教育の普及は諸外国に例を見ない成果を挙げたことも事実である。これが何故に帝国主義戦争に突き進むことになったのかは、また別の歴史命題であろう。

いずれにせよ、昭和20年（1945）、日本は連合軍に無条件降伏し、敗戦国となった末に、教育制度は根本から覆された。戦前教育はことごとく否定され、よって師範学校制度も廃止された。そしてかつての師範学校の多くは都道府県ごとに設立されることとなった大学の教育学部とされ、東京府の師範学校は統合されて東京学芸大学となったのだ。

それまで都道府県ごとに師範学校があり、そ

この出身者のみが入学を許され、卒業後はその都道府県にのみ「奉職」した制度は、開放された。今、わが母校には日本全国から学生が集い、日本全国に教員として就職していく。これはこれで素晴らしいことである。そしてこの開放された教員養成制度のもと、今一度、地方の教育を見直していくことになれば、幸いである。



小石川区竹早町の女子師範学校全景

写真は『東京学芸大学二十年史』東京学芸大学創立二十周年記念会編より

TGU 200号記念

文章・レイアウト

千葉美波（06年 美術科入学）

1968年5月創刊の「教務補導部だより」からスタートした学内広報誌「TGUキャンパス通信」は今年7月、200号を刊行しました。本誌は、1977年9月の54号より「教務補導部だより」から「キャンパス通信」に改称され、さらに2006年夏の196号より誌面を一新し、身近な情報誌「TGUキャンパス通信」として生まれ変わりました。あわせて、これまでの夏秋冬の年3回刊行をあらため、2007年4月の199号より春夏秋冬の年4回刊行とし、誌面のいっそうの充実をはかりました。

「TGUキャンパス通信」は主に、学生サービス課、グラフィック研究室・教授、学生を中心に作成しております。誌面企画、デザイン、取材を通してキャンパス通信が、学芸大学の情報発信源となるようにいつも心がけております。



Vol.1
教務補導部だよりが
スタートする

VOL.54
キャンパス通信に
改称される

Vol.151
表紙デザインを
初めて学生が担当する

Vol.196
全面フルカラーになる





イベント REVIEW

今回TGUキャンパス通信200号記念を機に、本誌がより多くみなさんから親しまれるものとなり、今まで以上に、学芸大学の情報をみなさんに提供し、学生・教職員をはじめとする多くの方々の交流の場となるようにという願いを込めて、7月13日～21日の期間「TGUキャンパス通信200号記念イベント」を開催しました。



①「キャンパス通信の歴史」

過去200号の膨大な資料から、TGUメンバーが厳選した貴重な資料を年代ごとに大きく8分割し、再構成しました。また、旧号も展示して、昔を振り返ってもらうコーナーを設けました。

②「学芸の夢」

200号記念のメイン企画として、より多くの教職員・学生を取り上げ、参加出来るように、「学芸大学200人の夢」という企画を立ち上げました。実際に学内にいる教職員・学生、計200人に「〇〇年後の自分に向けてのメッセージ」を、ミニ黒板に書いてもらい、写真、映像を撮りました。みなさん、それぞれ思いのメッセージを持っていて、とても新鮮でした。その中のベストショットを22人選び、展示しました。

③「200号記念映像」

200人インタビューの様子を映像にまとめました。バックミュージックは、学芸大学管弦楽団の有志が集まり、作曲・演奏したものです。

学芸の夢をのせて...



①S棟に付けた展示会のバナー ②展示会場がお客さんでにぎわっている様子 ③オープニングパーティーにて、スコットランドのバグパイパーの演奏 ④麓山学長と村松副学長の挨拶 ⑤展示会場



TGUの目指す場所

今回の200号は、今までにない企画内容だったので、学生の間でも話題になり、TGU200号記念展示イベントの来客数が約600名、TGUキャンパス通信200号が約1000部なくなるといふ、前代未聞の数字を記録しました。200号の冊子と展示で、TGUキャンパス通信が教職員・学生の身近な存在になったことを実感しました。もっと内容を密にし、さらに教職員・学生が情報を共有し、交流していける場になるように、務めていきたいと思っています。

TGUキャンパス通信の展示物は、美術棟グラフィック研究室にありますので、興味を持たれた方は、お問い合わせください。

ほかにも、200号記念として、TGUオリジナルエコバックやTシャツ、缶バッジなどを自分たちで作り、来場してくださった方々の中から抽選でプレゼントする企画も行いました。予想以上に好評だったので、今後とも機会があったら続けていきたいと考えております。

TGU200号記念
オリジナルエコバック&Tシャツ

環境活動への取り組み

環境保全、環境負荷の低減を目指して、本学では日常生活において、一人ひとりが環境活動に貢献する取り組みに努めています。

●返納物品活用バンクの設置

物品の再利用を推進し、効率的使用を図るため、平成17年度より本学ホームページ上に「返納物品バンク」(学内のみアクセス可)を設置しました。不要な物品を返納する際、ほかの人が使用できるような物品をバンクに登録し、

学内から再利用者を募り、物品の有効活用を図るものです。

バンクには10万円以上の備品に限らず、10万円未満の消耗品も登録でき、什器、PC機器、家電、楽器その他文具等、登録された82件のうち43件が再利用され(再利用率52・4%)、物品の再利用・効率的使用に多大な効果がありました。今後も継続し、定期的に公開、公募を行っていきます。

●省エネルギー・節約対策の実施

本学における省エネルギー・節約対策は、平成16年9月に策定した「省エネルギー・節約対策実施要綱」に基づき行っています。一人ひとりが無駄なエネルギーを使わないようライフスタイルを見直し、電気・水道・ガス等の使用量の削減を図ることが、CO₂の削減につながります。

真、包装紙、バインダー(金具、綴じ紐、テープ等で綴ってある物)、紙くず等が、ミックスペーパーに分別できます。この回収方式の導入により、可燃ごみが減量し、可燃ごみの焼却経費が節約でき、焼却処分による環境負荷が軽減されます。

●剪定枝を再利用して小径造り

学内にある200種・4100本の



高木類。飛来や落下を防止し、保全を図るために、東門から小学校、中学校、前のケヤキ並木の枯れ枝等を剪定し、発生した枝は構外に搬出せず、チップ化して、再利用しています。再利用によって、環境への配慮およびコスト削減が図れました。

て、再利用しています。再利用によって、環境への配慮およびコスト削減が図れました。

●構内事業者(東京学芸大学生活協同組合)の取り組み

◎ISO14001の認証取得

本学生生活協同組合(以下生協)は、平成16年7月に、環境負荷を管理する「環境マネジメントシステム」IS

再利用例
総合教育学系・人文科学系研究等1号館の中庭にチップ材を敷き詰めて小径を造りました。その他にも、幼稚園の園庭にチップ材を敷きました。



「O14001」の認証を取得しました。本認証により、環境保護の取り組みに関する計画の立案(Plan)、実行(Do)、チェック(Check)、見直し(Action)という「P・D・C・Aサイクル」を通じて、環境負荷の改善を継続的に進めます。

◎循環型社会に向けた取り組み

生協は、環境マネジメントシステムの基に、「環境基本理念」および「環境方針」を作成し、良好な循環型社会に向けて、①食材等の廃棄量抑制・包装資材の削減、②電気・ガス使用量抑制、③グリーン購入の推進、④環境活動の定期的な報告、⑤全職員への教育・啓発活動による環境意識の向上など、さまざまな取り組みを推進しています。(東京学芸大学環境報告書2006資料より 幹事 古瀬政弘)

小金井祭での ゴミの減量

くごみから始めるエコ意識

●青空教室

青空教室は、小金井祭で出るゴミを減らすことを目的に2004年度から活動している学生団体です。活動を通じて、小金井祭のゴミ減量だけではなく、小金井祭における環境負荷の低減、また日常生活でもゴミを減らすという意識を多くの人に持つてもらうことを目的としています。

主な活動内容は、エコ箸の導入・リサイクル、エコ容器の導入、ごみ分別ナビゲーターの配置、環境負荷に関する展示、ごみ総量調査などです。今回はその中のエコ箸についての活動を紹介します。

●国産間伐材割り箸の導入

大学生協で日頃使われている割り箸が、国産の間伐材割り箸（以下、エコ箸）です。青空教室では2005年度から大学生協と協力し、割り箸を大量に消費する小金井祭でエコ箸の導入を始めました。エコ箸を利用する団体に

は、事前に割り箸や森林について説明する勉強会に参加してもらい、エコ箸を使うことは環境だけでなく福祉にも配慮した行動ができることを理解してもらいました。

エコ箸の導入数・導入団体数は、3年目を迎える今年度も順調に増加して



毎年大量の割り箸が「可燃ゴミ」として捨てられていました。これを、「割り箸」として分別し、リサイクルへまわすことで、ゴミの直接的な減量につながられ、新たな資源へと生かすことができます。また、各団体や来場者にも分別に協力してもらうことで、環境意識を高めることができると考えました。青空教室では、割り箸の回収箱の製作・設置と使用済み割り箸の回収、リサイクル会社への発送を行いました。過去2回の小金井祭で回収した割り箸の重量は学芸大学の生協施設で、日常的に使われる割り箸の約1年分に相当する量になりました。

います。過去2年間では約2万膳のエコ箸を導入することができました。小金井祭に参加している全団体に導入してもらうことを目標にしています。

●割り箸リサイクル

割り箸リサイクルは2005年度から実施された企画です。小金井祭では、

●ここがすごい!! エコ箸

私たちが普段使っている割り箸の97%は海外から輸入しています。これは、最初から割り箸を作る目的で伐採された木材から作られています。それに対して、エコ箸は、日本の森の手入れをするために切られた木を有効活用

して作られています。そのため、海外の森林を守ることもできるし、日本の森を元気にすることもできるのです。また、大学生協で使用している間伐材割り箸は、NPO法人JUNON（樹恩）ネットワークが提供してくださっているものですが、その間伐材割り箸の製作活動は、障害者の雇用促進にも役立っています。

●樹恩割り箸 講演研修会

2006年10月4日に「知りたい!聞きたい!JUNONのお箸!」と題して研修会を行いました。当日は、青空教室のメンバーだけでなく、東京農工大学の学生も参加しました。

JUNONネットワークの鹿住貴之事務局長を講師としてお迎えし、割り箸やNPOで働くことについてお話を伺いました。JUNONネットワークの森林保全活動についてお話を聞き、間伐や箸について、理解を深めることができました。（青空教室4年 神村）



小金井分校昔心地

恩師をしのんで

辟雍閑話人

林 静代



ふりむけば、昭和35年（1960）の春は、私が東京学芸大学小金井分校に採用され、職員となった始まりでした。

あれからかれこれ五十年、今、わたくしはその長い縁に困って、この機関紙「辟雍」を発刊している同窓会の事務室に席を置かしていただいております。時の流れとは過ぎ去ってみれば森羅万象かくも短く、あらゆることが凝縮されてしまったようにも覚え、そこには自分が存在したという確かさだけが「時」の一点の現象としてあつたように思えます。

そのことは又、一方においては自分がいま此処に在ることすべてが一期一会、転じて「値遇」の有り難さでもあり、今日までのわたくしのこころの拠りどころの所以とすることを深く想わずには置かれませんか。

東京学芸大学五十年史に詳記のとおり、昭和39年（1964）全分校の廃止と同時に大学が小金井キャンパスに統合が実現いたしました。わたくしの小金井分校時代は三年間ほどのことになります。タイムスリップして当時のさまざまな事柄を思い浮かべようとするとき、あの頃のわたくしはまるで暗夜の道に迷い込んだようで、組織の一員としての自覚もないまま、時が過ぎ去ってしまったという

ことを、この章を綴るにあたつて、再び、思い起こさねばならぬとき、わたくしは験の中に走馬灯の影絵のように当時のかたがたの面影が浮かびます。

先年亡くなられたN氏は、わたくしが小金井分校教務係に始めて勤めをした時の上司で真言宗の僧籍をお持ちの方でした。稚拙な私は多くの教えを受け、わたくしの生涯ある限り「私の上司は恩師」の思いを心に懐き続けることの縁を誇りと致しております。

その当時のことを思い出すと未熟で恥じ入ることですが、忘れられない負のエピソードの数々がよみがえります。

その頃（1960）小金井分校は十萬坪の校地が確保されてまもない整備途上であり、空っ風の吹く時期には構内中、土ほこりが舞い上がり、木造の事務棟もご多分にもれず、事務机等の上は日に何度も雑巾がけをしたものでした。

そんな折、雑巾を漱ぐバケツの水が冷たいときなどぬるま湯を使ったりしたのですが、水の取り口が狭いためバケツを傾げて蛇口から給水したとき、お湯を先に入れて水を加えるとぬるま湯になっても同時にこぼれてしまつて必要な分量までバケツの中が満たされないのです。傾けたバケツに適当な水を入れたあと、湯を



加えて程々の湯加減にして雑巾がけをしていたのですが、或る時、我が上司にその行為を見つかって、『逆さ水は駄目』って叱られて、何のことやら……。そのときは謂われ無いことのように思い、びっくりしただけでしたが、『逆さ水』とは亡くなられた方の御身体を清浄にしてさしあげる時の作法で、お水の中に湯を入れてぬるま湯をつくる葬儀の慣わしだのちに教えられました。

机の上の大きな花瓶を引きずって持上げては叱られたこと等々、あの頃は何やかやと騒動を起こしてばかり居たものですから……。

圧巻は「だるまストーブ灰神楽事件」それは夕刻に消えたストーブの灰を掻き出している最中のことでした。中の受け皿が脱落し、脇に居られた某教授の御髪の薄い頭に沢山の灰が舞い散って……わたくしの脳の中は真っ白、「ごめんなさい」のひと言があのとくに言えたかどうか、あまりにも気が動転していたのでしょう、思い出せませんが、本当に身体全体が縮まったような感じを覚えております。そのときの教授は叱るでも無く、鞆を抱えてそっと出て行かれてしまった後姿だけがわたくしの脳裏に今もくっきりと思い出されます。その後姿は軽率なわた

くしの行為に対しての叱らない叱責であつたと今でもそう受け止めております。そのような日々の中にもわたくしが読書への傾倒を深めていくきっかけを与えられたのも上司のN氏から拝借した一冊の小説でした。吉屋信子著「徳川の夫人たち」思い出の書です。中世の歴史に広く興味をもったのもこの一冊から始まっていたのです。

事毎につけ上司のN氏には落着きの無い当時のわたくしに日常のさりげない出来事に託して叱責を戴きましたが職場に在りながら、学生時代よりもっと多くのお教えを受け真の成人として歩むべき道を教えてくださいました。「少年老い易し……」のごとく、今、わたくしは当時の師の歳をとくに越えてしまいましたが、若き日に、ともすれば輕輕に振舞った事ばかりで過ぎてしまった日々を虚しかったと振り返る時、「今日、現在」を丹精に生きたいと思う心になって返ってきます。

「叱られる人うらやまし年の暮れ」（一茶）の句を思い浮かべるとき、わたくしの「このころの師」で在り続ける上司N氏に今更ながら有難く、生涯の精進にこころを尽くさなければならぬ事と思うこの頃の日々であります。

本部

本年度は5月26日（土）に定例の理事会が開かれ、議事については運営委員会原案どおり可決されました。

●絵双六について

昨年度事業として、学芸大学図書館所蔵の「明治期の絵双六」復刻版を製作・販売していますが、予想を上回る好評を得ており、会としては意を強くしております。今回製作・販売されているのは「小学尋常科高等科修業書語録」と「二十四時家庭双六」の2編のみですが、大学図書館にはこれ以外にも所蔵されており、今後、増刷や新たな復刻版の製作も検討が必要と考えます。

●東京学芸大学学生歌「若草もゆる」のCD化

昨年度からの事業として、学芸大学において広く長く愛唱されてきた学生歌「若草もゆる」を事業部がCD化し、販売を開始しました。「若草もゆる」は57年に制定ですので、本年は50周年にあたります。作詞、作曲、編曲者については本誌4～9頁をご覧ください。今回のCDの演奏は東京学芸大学混声合唱団、同管弦楽団、編曲 山内雅弘氏、指揮 広井隆氏によるものです。ぜひ購入していただきたいと存じます。（定価1000円、会員価格900円）

●役員の交代、就任について

諸般の事情により辞任された東原昌郎副会長の後任に金沢育三氏、事務局長の交代による菊池俊昭理事の後任に牧山助友氏、校長就任による事業部長筒石賢昭理事の後任に室屋隆吾氏、会の運営円滑化のため新理事に鳴海多恵子氏、以上4名の変更が理事会において承認されました。

●学生の就職支援事業について

大学、社団法人東京学芸大学同窓会、辟雍会の三者で協力して就職推進事業を進める方向となりました。従来は東京都中心でしたが今後は他県、特に支部のある県から広がっていくことと、当面は近隣三県に焦点をあてて進めていくことで検討されています。

●辟雍会会長候補者推薦委員会について

荒尾現会長の任期が平成20年3月末日であることから、会則および会長推薦規則第2条に則り7名の委員選出が必要となりました。理事会にて事務局案による7名の委員推薦提案が承認され、委員会は9月より活動を始めています。

本年2月28日の運営委員会後に、昨年急逝された前幹事長 池田義人先生を偲ぶ会が行われました。池田先生の多大なご尽力によりスタートした辟雍会も4年目となり、徐々に会としての活動方向が定まってきたように感じます。今後さらに発展・成熟した会とするため、皆さまのご協力をよろしくお願い致します。（幹事長・山本一雄）

事業部

●11月3日の本学ホームカミングデーのイベント

学生歌「若草もゆる」の周辺をめぐる、成立の契機や経緯を、作詞者や作曲者、編曲者をお招きしシンポジウム形式で語ってもらい、レコーディングした本学の管弦楽団や混声合唱団に記念の演奏会をしてもらう予定。

●学生のキャリア支援

これまで、就職支援事業として「WORK 語り合い」を主催してきた。社会人と語り合うことで、自らのキャリアについて考えるこの事業に加え、本年度から大学や東京都の本学同窓会と連携した新たな事業を展開する。その一つは、教職をめざす学生が日ごろ感じている疑問や不安を、OBを含めた先生方や保護者の方々にぶつける場を設定する「とことん相談会」（仮称）である。この企画は、報道等による学校現場の大変さにより自信を失いかけている学生にも、新たな動機づけを図るものとした。このほか、希望者を募り、企業向けのキャリア支援セミナーや、教員採用一次試験対策セミナーを実施する予定である。

●本学卒業生の磯崎弁護士による法律相談会

毎年無料で実施しているものである。会員のさまざまな法律上の悩みや生き方の相談等に親身になって相談している。詳しくは辟雍会事務局へ（事業部長（代）・筒石賢昭）

広報部

本年度も役立つ情報を提供するホームページ作りを心がけています。

7月21日に大学説明会が開催され、約5000人の高校生が学芸大を訪れましたが、今年も辟雍会の紹介パンフレットを複製し配布を行いました。パンフレットには大学卒業後の就職先と、卒業生6名在、学生1名からのメッセージが掲載されました。

ソーシャルネットワークシステム「辟雍会アクセス」を前田幹事に構築してもらい、授業などを通じてテスト運用を行いました。200名近い登録があり、活発な利用が行われましたが、同時に、幾つかの問題点も明らかになりました。今回の結果に基づき、会員だけが情報を共有し交換できるシステムを、近い将来提供する予定です。

ご覧の通り辟雍4号では他誌とのデザイン的な差別化を図るため、縦が少し短い変形A4版とし、文章も縦書を主体とするスタイルに変更しました。（広報部長・真山茂樹）

組織部

辟雍会組織部の当面の第一課題は、会員の情報を集め、管理し、活用できるものとして蓄えることだといえます。会員の情報といっても、従来のように住所や電話番号、卒業の年度や専攻といったものに加え、この数年はメールアドレスなどという大変に便利で、伝達速度の極めて速いものが登場しています。この速くて便利な情報は、同時に恐ろしくすばしい奴で、うっかり目を離せません。組織部では、こうした情報の安全管理に相当な神経を使っているところです。2007年度は、新入生の皆さんからお預かりしたアドレスや、昨年度までに寄せられた情報によって、多くの在学生会員との連絡体制が整いつつあります。そこで、集会の計画を具体的に進め、これを発信して、学内での学生の会を開催して、はじめの一步が動き出そうとしています。また、卒業していこうとする1000名余の4年生への今後の支援として、各地の支部の充実も急務であると考えております。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。（組織部長・井口太）

編集＊後記

■広報部担当幹事の守屋敦子さんが9月に亡くなりました。友でもある先輩を失ったことはすごく寂しく、また、「辟雍」4号の編集作業にも大きな痛手でした。葬儀で飾られた遺影のはなみをいつまでも忘れません。ご冥福をお祈りします。

今回の編集作業は、悲しい出来事などもあつて前途多難を予想させるスタートでしたが、池上さんの若い力とセンスで気分一新する出来映えになったと思います。有り難うございました。（鳴海多恵子）

■元はといえば、昨年、遠藤さんが提案した「縦書き」でした。装い新たなる本号で、いざ編集してみると、横書きとは比べものにならない苦難の連続が…算用数字が漢数字が、英語は寝かすか立てるか云々。本学卒、新進気鋭のデザイナー池上さんと頭を悩ますのも今宵限りです。

本号の作成では本当にたくさんの方に助けていただきました。ありがとうございますー！ありがとうございますー！！（真山茂樹）

■辻邦生の「嵯峨野明月記」にこんな一節がありました。「蠟がとけて

滴り落ちるように、少しずつそこに積み重ねられてゆく…。歳月が、層々と積み重なり…。永遠に流失するということはない…。辟雍会の仕事、「辟雍」の発行作業もまさにその通りのように思います。（遠藤満雄）

■今回は「地方」がテーマということで、原稿依頼で久しぶりに遠い卒業生の元気な声を聞くことができた。卒業後月日の経過があるにも関わらず、会話の節々に変わらないあの「学大生」の穏やかな雰囲気が残っているのは小金井の緑多き自然が育んでくれているような気がします。（古瀬政弘）

■いま、飯島会館（辟雍会事務室）前庭は日本庭園として変るべく工事中です。この「辟雍」4号が発行される頃には、枯山水の様を呈した全貌がみられるかもしれません。時の流れとともに周囲は変化し、刺激あい、それが未来へと輝いていく。「辟雍」もそんな力を持てると思います。（蜂谷文子）

◎制作協力

正木賢・松田寛子

◎写真提供

井上録郎・上原茜・八重樫幾世子